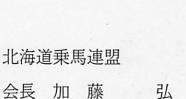


北海道乗馬連盟

四十年史

ANNIVERSAL 40





昭和28年に北海道乗馬連盟が創立されて40年を迎えましたのを機に、此の長い歴史を収録し記念誌として発刊することになりました。

連盟結成当初から幾多の苦難と奉仕という変遷を繰りかえしながら、こんに ちの基盤を築かれた先輩の皆様に、往時を偲び、その偉業に感謝と敬意を表す る次第です。

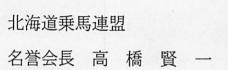
当連盟は北海道体育協会に加盟するとともに社団法人日本馬術連盟の組成団体として、2度の国体馬術競技会を開催しました。その後、国体、全日本大会などへの参加を活発にするとともに、全道大会を年に5回、高校、社会人、その他全国レベルの事業も活発に開催してきました。その過程に於いて国体優勝2回、上位入賞も数多く獲得し、参加選手はもとより、会員の乗馬技術の向上は目覚ましいものがあります。

なお一般にも乗馬普及が行き渡りつつあり、近年各地域に乗馬クラブの誕生が数多く見られ、乗馬熱の高まりは目を見張るものがあり、北海道の乗馬界も全体に活況を呈して参りました。この状況に鑑み、今後の事業推進については先ず第一に、会員団体が道内一円に広く点在している現実を念頭に置き、各事業が円滑整正に実施され、多くの人馬の参加が望める展開にすることが肝要であります。

幸い本年は創立40周年、極めて大きな節目を迎えたのを機に、「馬産地、北海道」の名にふさわしい、乗馬家の養成を目指し全機能をあげ努力するつもりであります。

関係の皆様のご支援を切望し記念誌発刊のご挨拶といたします。

40年史の発刊を祝って





北海道乗馬連盟会長加藤弘さんがわざわざ小生の事務所に御足労を頂き、昭和28年10月に発足して以来今年で40年を迎えるに当り、これを記念して「北海道乗馬連盟40年史」を発刊することになったので巻頭を飾る挨拶文を書けとのこと、突然のことでとまどいましたが、北海道が初めての国体を引き受けた時のことを思い出しました。当時は地方競馬もバラバラで私の場合は東室蘭、岩見沢等に競走馬を出していた頃であったと思います。その関係で道庁から馬を買って来てくれと頼まれました。20頭の馬を探してくれとのことで日高のセリ市を廻って20頭の馬を購買して来たことを思い出します。

それを中央競馬会にお願いして、厩舎を貸して頂き、当時北海タイムスの社長をしておられた菊地さんを会長にグループを作って、国体に向って馬の調教を始め、準備を進めてやっと国体に間にあったのです。菊地さんは36年迄会長を努めて頂きました。外に札幌市議会議員の竹田忠幸さんにも何かと御世話になったことでした。

月日の達つのは早いもので二度目の国体が北海道に回って来たのですが、この度は馬術連盟がしっかり出来ていたので3年前から準備を進めることが出来、優勝することが出来たことは幸いでした。

それから乗馬熱は益々盛んになり、結構なことと喜んでいます。

北海道は全国一の競争馬生産地ですが殆どがサラブレッドです。馬術・障碍 に合う体型の馬の選択が必要だと思います。

発刊のこ	とば	北海道乗馬	連盟会長	九]藤	弘		
40年史の	発刊を祝	って						
10 20		北海道乗馬	基盟名 灣	会長	高橋	· 賢一	.	
グラビア	ア のページ	•						
		創立40周年	記念式典	・祝賀	会			
		40年の歩み	,					
40国年太	迎えてひ	ル テル						
40/HJ-F	. E. CO	浦 河	町	長	谷川弘	小郎	••••••	1
		旭川乗			宮田	四郎	•••••	2
		北海道乗馬		-	岡田	光夫		5
		北海道乗馬	長連盟副会	長	吉田	勝巳	••••••	6
		北海道乗	馬連盟監	事	河田啓	一郎	••••••	9
		足寄乗	馬クラ	ブ	橋本	民雄	••••••	12
		岩見沢乗	長馬クラ	ブ	辰田	詔平	••••••	14
		北海道大学	卢馬術部部	『長	斉藤	善一	••••••	14
		北海道大学		_	佐合		••••••	17
	•	岩見沢勇			中曽相		••••••	20
		乗馬クラフ	ブメインフ	フィーバ	レズ	高田	龍馬	22
小海滨县	美毛油明 俞	立の歴史						
•		。 連盟創立の	の背呂					
(1)						• • • • • • •	-	28
(2)	軍隊馬							28
(3)			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					29
(4)	社会人思							29
••	•	- iii 連盟の設∑	なと沿革					
(1)				• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		30
(2)	第9回国	体開催の場	頁	• • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • •		31

32

(3) 連盟隆盛期

(4) 連盟改革期	33
3 北海道乗馬連盟事業実績	
(1) 連盟主催事業	
① 講習会事業	37
② 強化事業	37
③ 競技会事業	38
④ はまなす (浦河) 国体強化事業	40
⑤ その他	41
(2) 臨時的事業	41
北海道乗馬連盟史年表(乗馬の歴史)	44
功労者及び功労馬受賞一覧	61
北海道の乗馬地図	64
北海道乗馬連盟会員団体名簿	66
北海道乗馬連盟組織図	70
北海道乗馬連盟役員紹介	71
北海道乗馬連盟役員名簿	74
	70
北海道乗馬連盟事業推進委員会名簿	76
	70
日本馬術連盟北海道地区審判員名簿(国内審判員、地方審判員)	18
7027 11.25 坐去 医生明人则 一种中人根和艾克斯基本民人相和	81
現行北海道乗馬連盟会則、理事会規程及び選考委員会規程	01
1. 汽光式医注明器口吐力扭药	90
北海道乗馬連盟発足時の規約	90
北海道乗馬連盟昭和51年改正の会則	95
北伊坦米	อบ
編	103

.•



北海道乗馬連盟 旗

創立40周年 記念式典·祝賀会

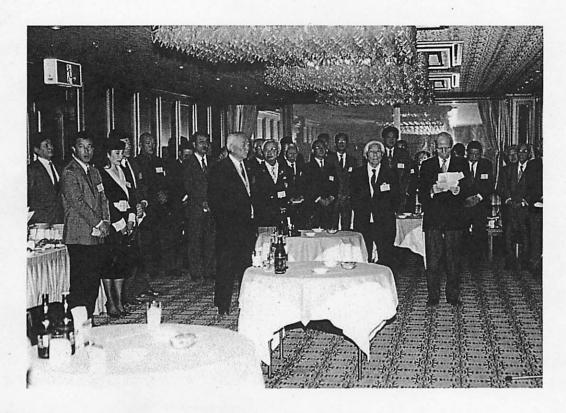
平成5年11月23日火 札幌グランドホテル 17階 青雲の間







日本馬術連盟会長 原 昌三氏



北海道乗馬連盟 加藤 弘 会長 式辞 (概要)

ご来賓の皆様をはじめ、お集まりいただきました皆様には、何かとお忙しいところ、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。

ご案内のとおり、当連盟が設立されましたのが昭和28年10月でございますが、北海道では昭和29年に第9回の国民体育大会が開催されるはこびとなり、急遽連盟の設立により、馬術競技の開催・ 準備及び競技参加体制づくりを開催したのであります。

連盟発足当時の会長は菊池吉次郎北海タイムス社長(現北海道新聞社)で、昭和37年から高橋賢一氏が会長に就任し、平成3年までの長期にわたり会長として当連盟の発展に大きく寄与されました。

顧みますと、当連盟発足後の歴史に大学馬術界は欠かせないものであり、道内外競技会での活躍 及び連盟開催事業への貢献は目覚ましいものがありました。

しかし、近年は道内各地に多数の乗馬団体ができ、各方面から会員が集まり、高校生及び一般社会人をも含めて幅広い地域から競技及び事業への参加協力が行われるようになりました。

そのよい例が、平成元年に開催された浦河国体で道内馬術関係者が一丸となって馬術競技会の開催に当たったことであり、その効果が現在にまで続いているという事実であります。その結果、国体、全日本大会、東日本大会などでも良い成績を上げることができました。

今後は、今日ご来場の皆さんをはじめ、関係各方面の方々のご指導とご協力を得て、ますます、

北海道の馬術が発展するよう努力して参る所存であります。

最後に、関係者におかれましては、今一度、当連盟に対するご指導ご鞭撻をお願い申し上げます とともに、本日ご臨席を賜りました皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げまして、私の式 辞といたします。

式典次第

式 北海道乗馬連 加藤 弘 (社) 日本馬術連盟会長 昌三 様 来賓祝辞 原 橘内 財北海道体育協会専務理事 折也 様 北海道生活福祉部生活文化課課長 磯田 憲一

祝 電 披 露 40周年記念功労者表彰

日本馬術連盟の原会長、千葉常務理事、長田業務部長を始め多数の来賓がご出席され、出席者は約80名と盛会でした。





宮田 四郎氏





日本馬術連盟 常務理事 千葉 幹夫氏







多数の祝電が寄せられた。









財北海道体育協会 専務理事 橘内 哲也氏



北海道生活文化課 課 長 磯田 憲一氏





小野寺 輝幸氏



浦河町 館 勝幸課長

















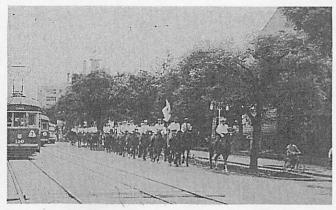




40 年の歩み

昭和29年 第9回国体記念パレード





(先頭 菊池会長 ~札幌駅前通)

昭和29年11月2日 荒川調教師送別会





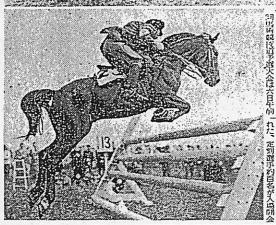
敬称略

昭和29年6月6日

第1回北海道馬術大会兼第9回国体馬術競技北海道予選大会 (札幌競馬場)

> 菊池会長挨拶 昭和二十九年六月六日





大)百八点の岡本(北大)の政権)(既馬場)百二十七点の大久保利 が行われ自馬中部のでは高橋選手 大三百六十七点 8 北大三百三十七学生中障害飛越舰技团体 6 节広窗 自馬中洋母飛越親技の高橋留次郎

本北河タイムス杯、道議会議長賞 会議長賞を授引した (競馬場) が快助、本社杯、道統 北海タイムス杯、 札幌市長賞大 (写真のは郊地大会長のあいさ

|第一回北海道周南県技大会東第九 | 九時から国無る札幌競馬場で開か | 式が行われた。 菊地大会長の探授 第一回北海道馬術大会開

についで来資祝辞、高橋密判長の 中障害飛越競技から熱戦の火焔 取り、供賣馬術、一般中陸の景越 を切り、大学生中成母飛起、ピン あつて開会式を終り九時半、自馬 住意、順井選手(速型)の質質が 容平規技、巻乗リレーの七規技が

自馬中障碍飛越競技徑路 所定時間 1分30秒 余裕時間 30 秒

△上〉約縣沒【4組】0成田忠学(連盟)0高橋路一(連盟)0高橋路一(連盟)0高 (連盟)0高橋路中(連盟)0高 (日組)0元橋忠中(連盟)0高 矢妃子(短数)の公崎ラクエ(現 (建盟) 【C組】 O は認武彦(魏以場) O 今野中人(北大〇B) の 岡川 直切(イ大) 大) @佐野(高大) @精山(高大) ②小林正昇(亚盟) ❸阿 部広道 ●阿 部広道

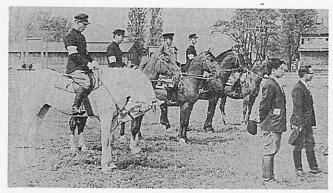
つのは自馬中職害飛越に係勝し

北海 タ 北海道議会議長賞

鉄道路切 三投模水 1.30m

第	1	競	技	自	馬中障	育碍	飛	越競技	
					_ + 4,				

	第 1 競 技	自馬中障碍飛越競技	9 時30分				
出場番号	粉 士 名	所 属五数馬 名 预箱	性	毛色	华令	延 地	
1	辯 原 正 人	北 大/0分岩女号 轻半	Uñ.	芦	20	胄 森	
2	岡本 洗	北 大 96 朝 符号 中半	弱	观	4	日高	
3	高 捣 留次郎	競馬場/27 アート号 中半	緊	IN.	13	日高	
4	大久保 刊 彦	北 大/09 採山号 中半	41:	無配	18	月寒	
5	难 植 红—0%	北大OB 7/幸運号 中半	Ca .	栗	9	月彩	



入 場 式



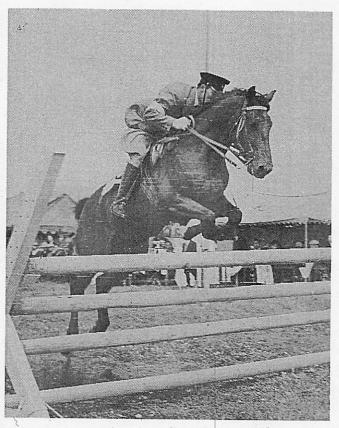
銀鞍クラブ 部班



開会式



荒川氏 本橋氏 馬橋氏



高橋 留次郎氏



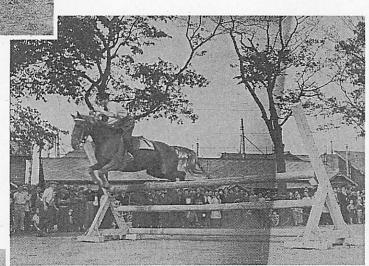
荒姉本高川崎橋氏氏氏氏



昭和29年秋 月寒八紘学園に外乗

奈良、太田、小林、菊池、姉崎、 津幡、稲垣、新矢、白幡、小野寺 氏ほか

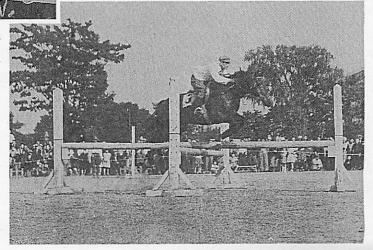
札鉄乗馬クラブ主催 馬 術 大 会 昭和29年9月23日 (札幌市大通西7~8丁目)



新矢氏



庄 藤 岡 半 内 井 田 沢 氏 氏



鎌田氏

昭和48年 札幌楽馬会



西村氏

飯 半 佐 金 鎌 庄 高 島 沢 藤 子 田 内 橋 氏 氏 氏 氏





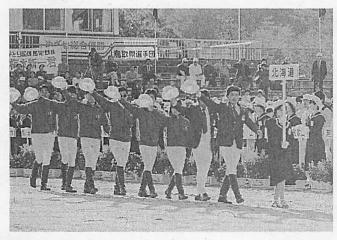
西村氏



国体シリーズ 昭和39年6月 新潟国体民宿 (新潟沖大地震直前)



昭和60年10月 鳥取国体



開会式



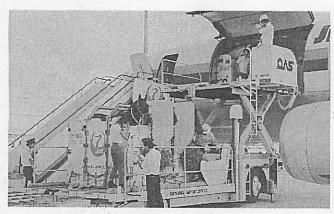
馬到着

国体シリーズ 沖縄国体 昭和62年10月26日 (航空機輸送)



那覇空港到着



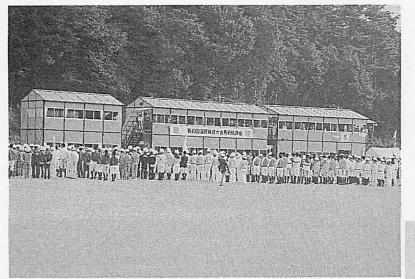




浦河町激励 (仮廐舎前)



サボテン公園前

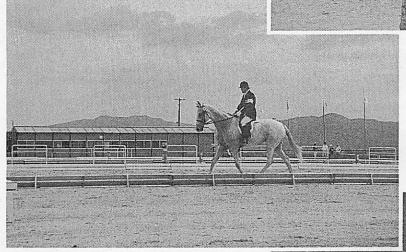


国体シリーズ 京都国体 昭和63年10月 (北海道国体前年)

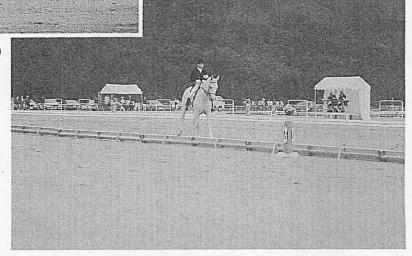
開会式



総合馬術 野外騎乗

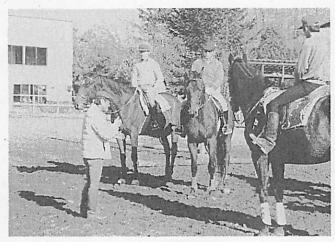


総合馬術競技 (久保田選手)



セントジョージ賞典 (小川選手) 馬 場 馬 術 競 技

浦河国体 強化巡回指導

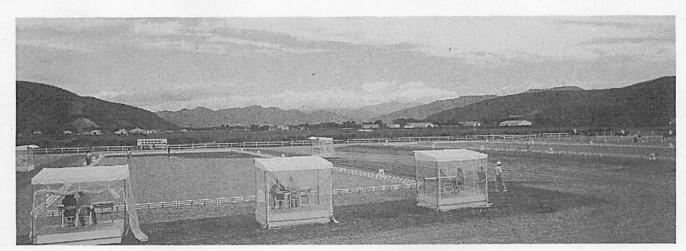


村上 捷治氏 (モモセ)



(酪農大学)

指定馬審查会

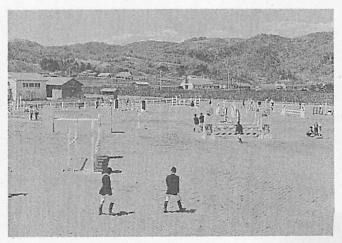


平成元年 浦河競技場



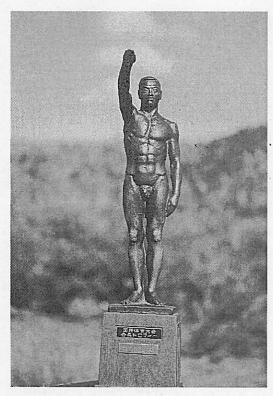
第1回 指定馬審査会

(モモセ)

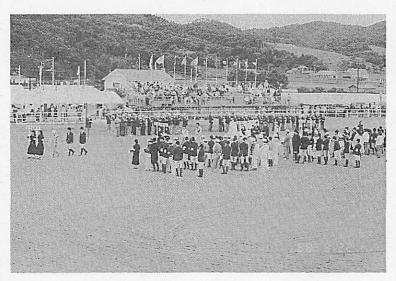


下 見

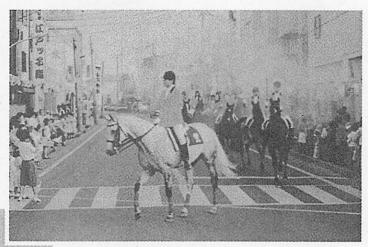
浦河国体 平成元年9月



優勝トロフィー



開会式 (リハーサル大会)



「優駿の火」トーチリレー (浦河乗馬同好会)



優勝 北海道選手団



少年クロスカントリー競技 (緒方選手)

各種大会 昭和60年7月 日本馬術連盟公認北海道馬術大会 (旭川:講習会を兼ねる)

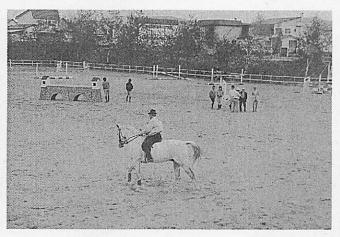




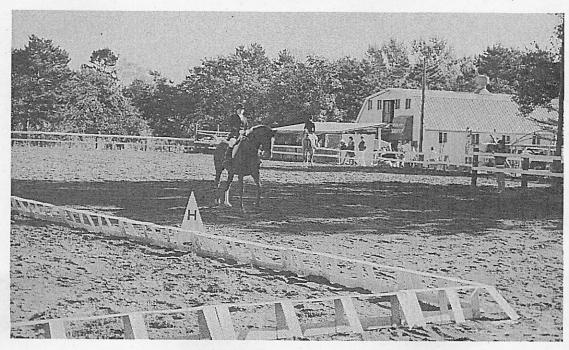
佐野 種茂氏

昭和62年6月 北海道自馬馬術大会 (モモセ)





昭和62年10月 北海道馬場馬術大会 (メインフィールズ)



各種大会 北海道地区馬術大会 昭和62年7月 (北星乗馬クラブ)



竹田 恒和氏



北海道自馬馬術大会(岩見沢競馬場)





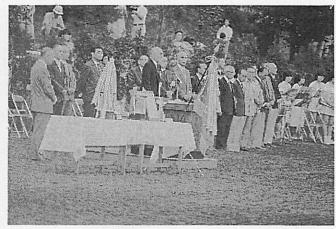
第15回日韓親善馬術大会 昭和52年7月(北大馬場)





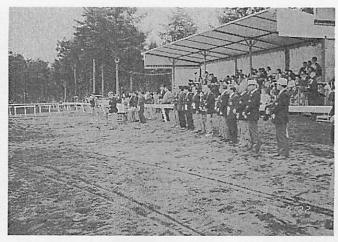
第15回全日本高等学校馬術競技大会 昭和56年8月(酪農大学)





第27回東日本馬術大会 平成3年9月(ノーザンホースパーク)





講習会

審判講習会(JRA札幌競馬場) 昭和62年5月

コースデザイン講習会 平成2年11月 (ノーザンホースパーク)

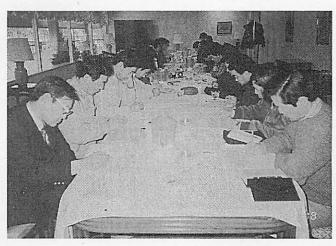


村上 捷治氏



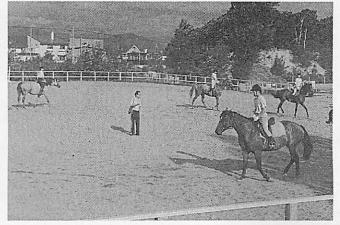


西村 喬氏



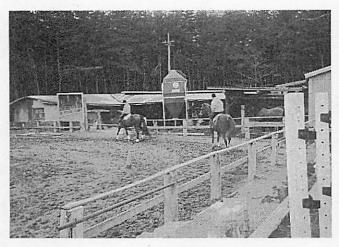
ジュニア講習会 昭和60年8月(モモセ)

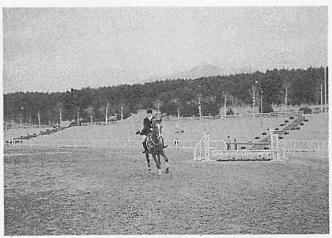




千葉 幹夫氏

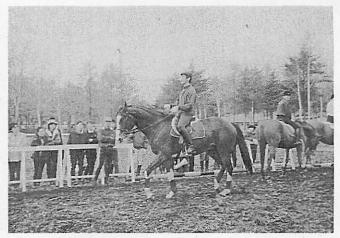
ジュニア道外合宿 平成4年3月(小渕沢)





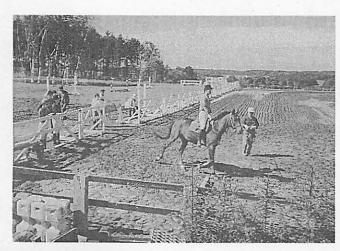
馬場馬術講習会 平成4年5月(ノーザンホースパーク)

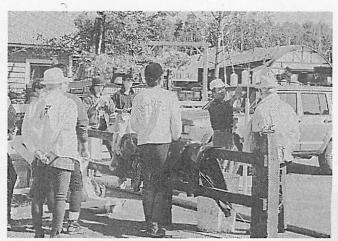




照井 慎一氏

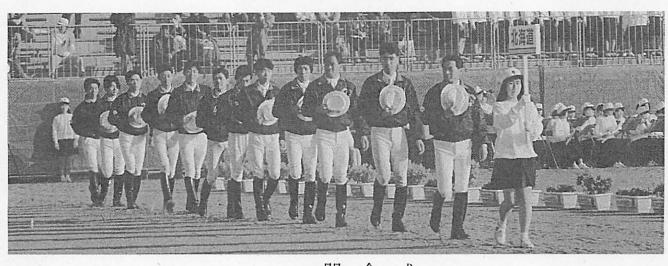
ジュニア自馬講習会 平成4年9月(日高ケンタッキーファーム)





白井 民平氏

平成5年10月 東四国国体



平成5年9月

開 会 式

内国産選手権では

ノーザンホー クの吉田君優勝 スパ



肌のトップに立ってしま



総合馬術野外騎乗 川久保選手



年 障 害 白井選手

乗馬の勧め

浦河町長 谷川 弘一郎

北海道乗馬連盟が発足されて今年で40年を迎えましたことは誠に喜ばしく心からお慶び申し上げる次第でございます。

「温故知新」の言葉のように、創設に当たった先人の辛苦を偲び、輝かしい発展の経過をたどりつつ40周年の記念誌を発刊されますことは、明日への飛躍を目指すためにも誠に意義深くご同慶のいたりでございます。

私は、3年前、馬との係わりの生活から一変して、町長という重責を担うことになり、以来、町民の皆さんを始め多くの方々から寄せられた貴重なご意見を取り入れながら、新たな時代に対応した郷土浦河づくりに全力を傾けてまいりました。

浦河町は、道内でも比較的早く拓かれた町であり、すでに 200年の歴史を刻むなかで今日の発展を遂げてまいりました。

いま、浦河は21世紀に向けて新たな町づくりを進めております。日本はおろか世界に誇れるJRA日高総合育成施設の整備をはじめ、農林水産省家畜改良センター日高牧場跡地を利用した馬をテーマとした優駿の里の建設や、日高山脈をくり貫いた野塚トンネルの開通(平成7年予定。)による道東地域との経済・文化交流の活性化、大通商店街の近代化、生活環境の整備、そして国際化時代への対応など着実に明日へと歩んでおります。

また、当町は、五冠馬シンザン、四冠馬ミスターシービーはじめ幾多の名馬を輩出し、日本一のサラブレッドの産地として全国に知られ、昭和60年からは「サラブレッド観光と乗馬のまち」を一村一品運動として取り組み、その一環として本年4月「浦河町乗馬公園」をオープンいたしました。

この公園は、平成元年、日馬連・道馬連をはじめ多くの関係諸団体のご協力のもとで開催しました「はまなす国体馬術大会」の跡地を活用し整備したものです。

談話室、研修室、シャワー更衣室などを完備したクラブハウス、1周 658m のトラック馬場、1面 600㎡の障害競技用馬場3面、1周 200mの覆馬場など

の施設を整え、町民 5,000人乗馬を目指した拠点施設として乗馬普及事業を展開してまいります。

もちろん、町民のみならず、当町を訪れる観光客にも気軽に乗馬を楽しんでいただけるよう、人・馬ともに体制を整えておりますので是非お立寄りいただきたいと思います。

乗馬の最大の魅力は、それが生き物を相手にするスポーツだということです。 数えきれない程のスポーツがありますが生き物を対象とするスポーツは他には ありません。

広い自然の中を人馬一体となって駆ける爽快感を満喫できるスポーツ、それ が乗馬なのです。

馬は単なる道具ではなく、個性もあれば感情もあります。それだけに思いやりをもって温かく馬に接することが大切であり、人と馬との信頼関係が生まれて初めて人馬一体となった素晴らしい乗馬を楽しむことができます。

どうぞ、多くの方々に乗馬を楽しんでいただきたいと思います。

乗馬の経験を積み、さらに高度な練習をかさねることで馬術競技へと進むことも可能であります。

近年、乗馬人口も増えつつありますだけに、この40年を契機とされまして、 北海道乗馬連盟が益々充実発展されると共に、馬産地北海道からオリッピック 選手をはじめ、各種の馬術競技会において常に入賞選手が育つ環境づくりに一 層のご尽力を賜りますよう希うものであります。

北海道乗馬連盟とともに40年

旭川乗馬倶楽部 宮田四郎

旭川乗馬倶楽部の創世期

旭川乗馬倶楽部の歴史は古く、大正時代の初期にすでに発足していたそうである。

当時旭川には陸軍第7師団があり、軍都として栄えた街で、各連隊の乗馬の

貸与や指導を得て会員数も 100名以上を超え、毎週日曜日に乗馬にくる会員も中学生・女性が多く、特に女性は服装が整い、綺麗に化粧した騎乗姿はまるで西洋の貴婦人を見る思いで、馬装を命ぜられた兵達が楽しみにしていたそうである。当時は連隊の下士官が指揮をしての遠乗りが殆どで、二列縦隊で旭川市内を一巡して帰るので、旭川市民の関心事でもあったそうである。

乗馬の後、鞍の上に忘れ帰った婦人のハンカチを後生大事に持っていた兵も いたとか、女性禁止の軍隊での兵達の胸の内を見る思いがする。

戦争激化により、昭和17年に倶楽部を解散する迄、故井上忠吉氏などは、軍 隊に籍を置きながら乗馬倶楽部の常任幹事として会員の指導に当り、北海道馬 術大会や、昭和16年4月の陸軍省・農林省共催の興亜馬術大会に、東北・北海 道地区代表として参加、数々の入賞をはたすなど、軍民一体の華やかな時代で あった。

倶楽部再建さる

現旭川乗馬倶楽部は、昭和37年に設立されたが、昭和35年に社団法人旭川乗 馬倶楽部を設立すべく、農林大臣・北海道知事に認可申請をしたが社団法人は 認可されなかった。

昭和37年の発足当時は、初代会長故阪東良一、副会長故石井幸次郎。理事故井上忠吉・小山昌克・遠藤義雄氏らであった。当時は乗馬4頭で発足したが、馬場は上川生産連より競馬場の片隅を借りて使用していたが、廐舎・廐舎敷地などの取得の為、会員や旭川市内の乗馬愛好者の人達に出資を仰ぎ、これらの資産を購入し、倶楽部の基礎造りをしたものである。

昭和41~2 年頃には馬も6~7頭となり、乗馬も活発になって来たが、特に 自衛隊第2師団長が乗馬倶楽部に理解を示し、自ら会員となり自衛隊構内で大 会を開き、又演習場迄の遠乗りなど、自衛隊員の会員も多く、随分助けられた もので、倶楽部の隆盛期でもあった。

この間、北海道乗馬連盟・日本馬術連盟に加入、更に全国乗馬俱楽部連合会に加入し、昭和41年には乗馬スポーツ少年団を結成し、全国乗馬スポーツ少年団連盟に加盟する迄に発展したことは、改めて先人のご苦労が偲ばれるものである。

道北随一の屋内馬場

昭和54年に競馬場跡地を旭川市が買収し、この付近一体をスポーツ公園化とするとの計画を聞き、当時の倶楽部会長小山昌克氏、会員であった三島市議や私(宮田)など、会員が総力を結集し、旭川市当局に乗馬施設の設置を働き掛け、その建設資金獲得の為、財団法人畜産近代化リース協会より建設資金1億円の助成金を確約するなどの運動が実り、待望の屋内馬場(800㎡)屋外馬場(4950㎡)が完成したもので、更衣室・シャワー室・指導員室・馬洗場・堆肥場などを備えた、名実ともに道北一の施設であり、改めて当時の倶楽部役員や、お世話になった方々に感謝の念を禁じ得ない。

ただ残念なことは、仮廐舎を造る敷地や練習馬場が無いため、全道の各種大会を招致することができず、旭川市民にハイレベルの競技を見せることが出来ないのが残念である。

千里の馬常にあれど、伯楽は常にはなし

旭川乗馬倶楽部会員も全道各種大会に出場し、数々の活躍をし入賞し、更には国体選手としての会員を育て上げた蔭の功労者をあげるとしたら、故井上忠吉氏であると思う。軍隊式の指導であったが、約20年間にわたり無給で倶楽部に詰め会員指導に当り、高橋和夫・斎藤武彦・米田逸郎・大谷直生氏などを育て上げ、国体に送り出したのは、本人達の努力もさることながら、井上忠吉氏の力に負うところが大きい。

これらの功績により氏は、旭川市スポーツ功績賞を受け、昭和62年に勲五等 瑞宝章を授与されるなどは特筆すべきものと思われる。

その後旭川より国体派遣の選手はでていない。まさに「千里の馬常にあれど (有望会員を含めて)、伯楽は常にはなし」である。

しかし当倶楽部にも若い有能な会員や、国体出場経験を持つ会員が揃ってきている。全会員一致協力しての大きな飛躍を期待している。

北海道乗馬連盟とともに、旭川乗馬倶楽部の益々の発展を祈念するものである。

第9回国民体育大会の思い出

岡田光夫

北海道乗馬連盟四十年史を作るので何か書くように依頼を受けたが、私が道 馬連との係り合いを持つようになったのはいつ頃だったかと尋ねられても、明 確にお答え出来ない。戦前戦後を通じて兵役の期間を除けば一貫して北海道大 学馬術部のお世話してきたと云えば口はばったいが、道馬連と云う組織の中で 仕事をした事は10年位前からの事だったろうか。

昭和22年に南方から復員して建設会社に1、2年勤めて、昭和25年札幌市役所に奉職したが、入営した昭和17年からこの期間が全く馬とは縁がなかった。 兵隊の時は自動車隊に入れられ隣りの馬中隊の演習を構内で見ていた。札幌に落着いて間もなく、学生時代から口には現わせない位お世話になった、故人になられた松本久喜先生に「北大の馬術部が復活したが、誰もいないので、馬狂人のお前が面倒を見てやれ」とのお話しがあり、朝、北大の練習を見てあげる様になった。当時北大馬術部は競馬場の御厚意で競馬場の繋養馬に乗せて戴いて居り、私も若かったので、松本先生の知遇に感激して多少の雨風をいとわず毎朝競馬場に自転車で通った。部員が休む様な天候でもあまり休まないので、申し訳ないと云って必ず見てきてくれたのが浦河に居る鎌田さんで、その頃の事がなつかしく思い出される。

第9回国民体育大会の北海道開催がきまり、それに対応する為に北海道庁の 畜産課に準備の窓口が出来、対応し北海道乗馬連盟が組織され、事務的に事が 進められて行ったが、北海道庁畜産課が主に事務を担当し、連盟の方では松本 先生、斉藤先生(現北大馬術部長)、競馬場の山下さん(現小野寺さん)が主 にその衝に当られ、お忙しそうに活躍されていた事が思い出される。

大会の事務的準備の中で、府県対抗貸与場競技に使う馬は開催県が準備しなければならないと云う事が、関係者の方々にとって頭の痛い大仕事であった。 馬産地北海道の名にかけて馬を集めなければならないと、お題目をとなえる事はやさしいが、実際にどうするかについては五里霧中であったのではないかと当時の方々の御苦労が想像出来る。道営競馬に出走していた馬を買い上げる事 でこの問題は解決出来たが、昭和29年5月に札幌競馬場に勢揃いした馬を見た時これをどうやって競技馬にするのだろう、どうやって9月の本番に間に合わせるのかと思った。やがて馬術連盟の大号令の下に、大げさに云えば、札幌中の馬乗りが集められ、早朝から調教がはじまった。それより以前に東京から元橋調教手が委嘱を受け、競馬場の前の農家に下宿して練習の指導に当った。次いで荒川調教手も来札し、2ヶ班に分けて調教に当った。競走馬だった馬も部班運動で、素直に騎手の指示に従うのをみて、馬もばらばらにして競争意欲をあおれば、ただ走るだけの馬になるし、部班運動でしっかり基礎調教をやれば、比較的早く競走心をあまり表面に出さず従順になるものだと感心した。とにかく本番には貸与馬障害競技に使えたのだから、両調教手の手腕力量には感服させられた。特に洋孝・セントエージの2頭は僅か5ヶ月の調教で供覧馬術でパッサージュ・スペイン常歩の演技を披露した事からして、両氏の優秀さを想像出来よう。

大会が終って馬達は道から大学馬術部に保管転換になったり、有償で払い下げられ、多くの馬は再び競走馬の道を歩んだが、大学・乗馬クラブに行った馬は長く愛育され、北大・畜大の黄金時代に活躍した。この様にして、国体を機に本道の乗馬熱が高まり、今回の道馬連の基礎を作ったと云ってよかろう。国体では、競馬場の走路を使った関係で施設は残らなかったが、貴重な馬が残ったと言えよう。

グラビアページに掲載した写真は、荒川調教手が任務を終って東京に帰るとき、当時の馬乗りが集まり、別れをおしんだ時の記念撮影である。今も元気で活躍されている方々の若い姿に微苦笑されると思うが、この方々の努力が、現在の道馬連の隆盛をもたらしたものと感謝申し上げる次第である。

ノーザンホースパーク

吉田勝巳

平成元年7月にノーザンホースパークをオープンして、早5年が経ちます。

学生時代から「馬のすばらしさを多くの人に知ってもらいたい。」という夢を 持ち、その夢をノーザンホースパークという形で実現する事ができました。

競走馬の世界においては、長年日本一という看板を掲げていますが、世界を 見るとまだまだあらゆる面で遅れを感じます。特に騎乗技術、飼養管理におい ては、その遅れが顕著です。その差を埋めるべく、自前で人材の育成ができな いものか、どうせ作るのであればまったく馬に触れた事のない人が、馬に気楽 に接する場を作れないか。この2つのテーマが重なりノーザンホースパークの 構想が立ったのです。

ノーザンホースパークができる前は、各牧場毎に繁殖牝馬の空胎馬を使って 乗馬練習していたのですが、教える方も教えられる方も使用する練習馬に苦労 したものです。

毎年30名の新入社員が入社する様になると、仕事の合間を見ての乗馬練習時間がなかなか取れず、又練習場所にも苦労したものです。パークでの練習は、手入れ・馬装・曳馬から始まって小さな障害を回れるまで、約半年間行います。又、競走馬に乗り出してからでも、バランスやフォームがくずれ、うまく調教ができなくなると仕事を終えてからでもできる練習場も充実し、当初に比べ随分変わったものだと思います。

一般の観光客の方も30万人の入場を達成する事ができ、又、曳馬・体験レッスン・馬車と若い方からお年寄りまで、馬の楽しさを味わっていただいています。初めて乗った時の背の高さを今となっては忘れていますが、皆さんの顔、声を聞くと一様に驚き、又、ゆれる楽しさを充分たんのうしてもらってると自負しています。実際、地元に帰られて乗馬クラブに通いだし、再度「北海道乗馬ツアーに来たんですよ。」と寄っていただき、少しは乗馬普及の手助けをしている気にもなりますし、嬉しく思っています。

馬の種類も、サラブレッド・トロッター・セルフランセ・ダッチブレッド・ラインランド・シャイヤー・クライスディール・アパルーサー・クォーターホース・テネシーウォーキングホース・ポニーなど多数そろえる事により、馬がサラブレッドだけではなく、役割により色々な種類の馬がいる事を解ってもらえると思います。

馬術競技においては、目の前で大きな障害を飛び越える躍動感を感じてもらい、踏切での人馬の息を合わせる様子を自分も息を合わせ、見事クリアすると 拍手喝采すると騎手も観客も大いに喜ぶものです。

馬術大会も毎年開催する事によって年々設備も良くなりました。仮設厩舎も200馬房を揃える事ができ、障害物や練習馬場も年々充実して、主催者も割りと楽な大会運営をする事が可能になったと思います。

当パークとしても、週末に馬術大会を開催している事により一般のお客様へのイベントとして位置づける事ができ、選手の方も見られる事により気持ちの良いプレッシャーを感じながら日頃の成果を発揮する事になり、一挙両得となりましょう。

平成3年9月には皆様のおかげを持ちまして、第27回東日本馬術大会を開催 する事ができました。参加頭数 150頭、延参加人員 431名という大きな大会に なりました。

大障害飛越においては、25頭の馬がS級のコントロールと飛越を見せ、初めて障害飛越を見る人達が、障害1つ1つを飛越する度に「ホウ」というため息と拍手をするという事は、それだけ魅きつける美しさがあったにほかなりません。それだけに、北海道の乗馬界の刺激になったと思います。刺激と言えばフランスからのジュニアチーム出身のヤン・カンドレも同様です。若干20歳で日本のワールドカップ・サブリーグを制したのですから驚きです。競技での集中力、脚力には日本のサラブレッドは少し弱すぎる傾向がありましたが、パワープレイ、オーキーという力のある馬の能力を引き出すのは、日本の感覚からすると「20歳にしては、たいしたものだ。」ですが、むこうでは、「普通」なのでしょう。

厩舎管理も「普通」に気を使っているのが日本人からすると「すごく」気を使っている事になります。この辺の違いは真に騎馬民族と農耕民族の違いだけではないと思います。パークのスタッフも馬へのケアを学び、今も実践しているのを見て少しは底上げになっています。乗るだけの技術だけではなくて、乗る前後のケアがあってこその乗馬というごくあたり前のことをあたり前にこなす馬文化の奥深さを感じます。

これからも、馬を通してのふれあいをテーマに様々な事にチャレンジしたい と思います。

馬とわたし

河 田 啓一郎

秋田の農家に生まれた私は、子供の頃から農耕馬を見て育った。風呂場の隣りが馬小屋で、入浴中も馬の鼻息を聞いた。本格的に馬とつきあうようになったのは、大学で馬の解剖を教わったとき以来である。戦後間もない頃、食料事情は最悪で、教授が「明日は筋肉の解剖をする!」と宣言したが、翌朝解剖室には骨格しか残っていなかった。

昭和30年代までは、北大家畜病院のお客さんは馬と牛が大半であった。春先は特に多忙で、馬虻駆除の薬を飲ませるのに鼻カテーテルが入らず、多量の鼻血を出させて先輩に叱られた。骨軟予防注射、妊娠鑑定、去勢、歯牙疾患など仕事は山ほどあった。一番難しかったのは跛行診断で悪くもない脚を治療して黒澤亮助先生を悲しませた。はじめての去勢をやらせて貰った晩は、後出血で死ぬのではないかと心配で一睡もできなかった。しかし、新鮮な睾丸のバター焼は最高のグルメであった。便秘症の馬を夜通し浣腸して治療している間に皮膚の毛穴から細菌感染して大きな膿瘍ができ、切れないメスで切開した跡が今も右腕に勲章として残っている。

「11 P M」というテレビ番組で、北海道独得のばんえい競馬のビデオにちなんで、馬の種付の解説をさせられた。藤本義一氏の司会で、金馬師匠(当時は小金馬)や、スポーツ評論家虫明アロム氏などと共演?した。女優真理アンヌさんの隣りに座り、学生諸君から羨しがられた。これも馬とのつきあいのおかげである。

昭和20年に北大に入学して馬術部に入りたいと望んでいたが、当時北大馬術部は休部状態で果たせなかった。馬の食い物を人間が食べていた時代であった。 28年に、北海道のはじめての国体で使った馬を貰って自馬とし、北大馬術部が 復活したが、すでに卒業したあとで、入部できなかった。しかし北大乗馬同好会が発足し、半澤先生、岡田先生、現部長の斉藤さんに乗馬の手ほどきをして頂いた。

佐合さん、小野さん、国鉄の田中さん、瀧澤迪子教授も仲間であった。札幌 乗馬クラブと合同で茨戸まで30数頭くつわを並べての遠乗会は壮観であった。

当時の乗馬はサラブレッドなどは一頭もいなかった。血統も定かでない農耕 馬みたいなものばかりで、中半血はまだよい方で、重半血のようなのもいた。 障害競技で失敗すると馬がこわれないで、障害が全潰した。

昭和48年に半澤先生が退官され、北大馬術部の部長を仰せつかり、4年間務めた。それまで低迷していた競技成績がなぜか突然開花し、第18回全日本学生馬術大会の障害部門で名馬スターライト号に乗った添田昌一君が優勝した。翌年も第28回全日本馬術大会中障害部門で長屋清隆君が同じスターライト号で再び優勝してしまった。スターライト号は日本馬術連盟と全日本学生馬術連盟から優秀馬に選ばれ、また長屋君は札幌市民スポーツ賞に輝いた。前任の部長の半澤先生が手塩にかけて育てて下さった選手と馬が、幸運にも私の代になって花開いたというのは、半澤先生には大変申しわけなかったが、私にとってはよい巡り合わせであった。

52年に酪農学園大学に移って2年経ったところで、同大学馬術部長の山下正 売先生(昭和12年北大馬術部主将、7帝戦優勝)が定年退職され、また部長を つとめることになった。

そこで私のツキはまだ続き、全日本学生馬術大会総合競技で騄閃光号に乗った橋本浩君が堂々準優勝してくれた。

56年に全国高校馬術大会が酪農大学馬場で開催された。当時高校生であった 礼宮(秋篠の宮)さまをお迎えすることになり、警備の打合せその他でずいぶ ん気苦労が多かった。この大会と北海道自馬馬術大会を酪農大学馬場で開催す るにあたり、国旗掲揚塔の新設や馬場栅の整備など、当時の道馬連の皆様の献 身的な御援助を頂き、無事開催できたことを改めて感謝申しあげます。

戦時中、全国で 170万頭も飼われていた馬は、半世紀もたたないうちにわず か数万頭に激減し、日本は馬産国といえない国になった。世界中でこれだけ急 速に馬が減った国も珍しい。もし何らかの事情で石油の輸入がストップしたら、日本の食料基地北海道の農業はどうなるのだろう。トラクターが動かせなくなったら馬力に頼るしかない(内地は和牛でノタノタやっても間に合うかも知れないが…)。馬は家畜のなかで最も繁殖効率が悪い。明け4歳から種付して、子馬が生まれるのは生後5年目。その子馬がまた母親になって、増産が軌道に乗るまでに10年はかかる。しかしその間にかなりの餓死者が出ることになろう。いまの飽食の民には想像もつかないだろうが、昭和ひとけた人は心配でたまらない。

(元北大・前酪農大 馬術部長)



乗馬クラブ設立の思い、雑感

足寄乗馬クラブ 橋 本 民 雄

私が馬術を初めたのは大学からで、当時現天皇が学習院の馬術部で活躍され、 良く代々木乗馬クラブでお会いしたものであった。又嶺雪号での障害飛越が今 でも脳裡に焼きついている。

昭和27年に関東学生馬術選手権が皇居の馬場で行われ、私も選手として出場した。大手門から入り厩舎内の嶺雪号にも触る事が出来たのも懐かしく、思い出の一つである。又、昭和27年に福島競馬場で行われた第7回国民体育大会では、昭和天皇御臨席のもとに、故人となられた小松崎新吉郎先生の神磯号による供覧馬術が披露され、その人馬一体の優雅に舞う高等馬術には唯々驚嘆したものであった。又、東日本馬術大会が岩手県の水沢市で開催された時は、遊佐幸平先生の銀波号による供覧馬術も脳裡の中に焼きついている。昭和28年にアメリカからライジングフレームという種牡馬が、戦後初めてカーネション牧場より輸入され、横浜の動物検疫所で検疫のため繋留され、私はサラブレッドの勇姿に身ぶるいする様な魅力を覚えた。

卒業後は、北海道で馬の臨床をと夢がふくらんだものです。念願叶い渡道し、以来長く大動物臨床現場で仕事に追われ、馬に魅せられた青春時代の夢も乗馬の機会も失った長い時代が過ぎ、50代半ばで、帯広の柏友会で乗馬する機会を持ち、遠ざかっていた競技の話や又クラブの方々の姿を見ているうちに、自分もまだ馬と共に楽しむ事が出来る、地元でなんとかクラブを設立したいと思いが募った。当町は国内でも有数の農用馬の生産地で、現在は輓曳用の重系の馬が育成され、毎年秋には輓馬大会が開催され道内各地から多数の参加があり、町の観光行事の一つとして位置付けされている。然し馬術競技となると未知の世界の人が多く、関心も薄いものでした。57年の輓曳祭典で、柏友会の協力で馬術競技の妙技を披露して貰い、其の後、数年続け馬術競技への理解を得るための努力を続けた。広大な自然の中で道産馬として、性格温順な乗用馬を生産し、多くの家族が動物に触れ乗馬を楽しむ、これが設立者の目標とする所です。

続けたら、又人との楽しい出会いを大切に生涯を若い愛好者達と乗用馬の育成と乗馬普及に頑張って行こうと思っている日々である。

クラブの紹介

設立者 十字式健康普及会 安久津 政 人 顧問 安久津 政 人 代表 橋 本 民 雄 事務局長 高 橋 一 二



10 75

北海道乗馬連盟40年史に寄せて

岩見沢乗馬クラブ会長 辰田 詔平

昭和47年6月に発足した当乗馬クラブは21年目を迎えました。岩見沢競馬場内に位置し、16号厩舎(12頭収容)1棟とその隣接地を開放され練習馬場を造成したものであります。その後走路の内馬場を乗用馬の競技場として造成致しました。

昭和48年10月にクラブ設立1周年記念をして第1回道内親善馬術大会を開催 し、その後も数多くの全道大会を主管し、道内各地から多くの参加を頂き盛況 を極めて参りました。

当クラブの特筆すべきは半民半官的というか、道営競馬・市営競馬開催中は、日・祭日は子供達を対象に、ポニー無料乗馬、誘導馬の事業委託、更にスタンド内に売店の出店等であります。常に乗用馬10頭~12頭飼育し、会員は50~60名位であります。

クラブ発足当初より国兼市長に名誉会長として就任ねがい、現在は能勢市長に引きつがれております。さわやかな深緑の春、5月、学生達も新学期となり、子供から老人まで乗馬を楽しむには最高のシーズンです。40年の歩みに敬意をあらわし、北海道乗馬連盟の充実発展を御祈念申し上げ、40年史の寄稿といたします。

高橋前会長就任の頃

斎藤善一

北海道乗馬連盟の40年史に執筆を依頼されたことは光栄に思うし、また、昔を振り返って懐しくも思っている。しかし、私が持っていた資料のほとんどは2度の引越で失われ、記憶だけに頼って書かざるを得ないのは残念であり、間違いがあってはいけないと思うと筆が進まない。初代会長の頃にも、連盟と日本馬術連盟や北海道体育協会の間の連絡係のような使い走り役をしていたので、

いろいろな裏話もあるが、個人的なものが多いので省き、連盟事務局を担当した頃の憶い出を述べようと思う。今日の、財政的に安定し、確実に機能し運営されている状態からみるとウソのような話もあるが御参考まで。

第9回国体に備えて北海道乗馬連盟が組織されたが、会長、役員、事務担当者、事務所(札幌競馬場内)すべて札幌乗馬倶楽部そのままであった。そのため同倶楽部と連盟の区別がはっきりしないこともあって、会員の不信がこうじていった。会長が菊地氏から高橋前会長にかわるのと同時に事務局を競馬場外に移すことが皆の要求するところとなり、北大農学部内に移し、私が事務局をあづかることになった。

高橋前会長は、道会議員としての立場を活用して、乗馬連盟に年間50万円を 馬事振興の目的で補助する条例の制定に努力されていた時で、前途は明るかっ たが、引継いだ連盟の財布は空っぽであった。やむなく会長に30万円(20万円 であったかも知れない)の借金をお願いしたところ、「そうか」と一言いわれ ただけで承諾され、数日後に道議会の議員控室でお金を受取った。私の月給が 1万8千円位であったから、1年分の俸給に相当する金額であった。このよう な大金を簡単に渡して下さったのには驚いた。勿論、道から補助金が支給され た時に直ちにお返しした。

こうして、連盟事務局は順調に運営されるようになった。会議の時は発言しないで、後から電話でネチネチとクレームをつけてくる役員もいて不快なこともあったが、いろいろな事業を計画する楽しみもあった。そのひとつが全道団体対抗戦である。6団体であったと思うが、各団体から醵金して頂いて立派な優勝旗を作った。騎兵連隊の軍旗と同じ寸法にしたので、寸詰まりであるが特色のあるものになった。第1回の優勝は北大乗馬同好会であった。

連盟の主要行事のひとつが国体選手の決定と派遣であることは今も昔も変らない。全道大会を兼ねた国体予選をする時期となり、それ迄は適当に選手を決めていたのを改め、厳正な選抜を行うことにした。予選に参加しないものは選手にしないという当たり前のことを、わざわざ役員会で確認して大会規定に加えた。ところが、参加しなかった某有力選手を外して案を作ったところ、大いにもめた。国体で好成績をあげることを第一に考えるべきであるとし、予選会

の規定などは無視する意見が大勢を占めた。結局、挙手採決の結果、満場一致 でこれが決まり、私は国体派遣が終った後に辞任する腹を決めた。高橋前会長 が臨席した最初の会議であったと思う。会長を農学部玄関までお送りした時、 どうして特定の選手にあれ程こだわるのかな、とつぶやかれたが、各団体から 参加した代表の方々には、決めたルールを自ら破るかどうか、という意味の採 決になるという認識が薄かったのであろう。折角の40年史に恨みがましい話を 紹介して恐縮であるが、これも当時の雰囲気を示す歴史の一端である。後日談 になるが、この後で、国体派遣は連盟の年度最後の行事と考え手持ちの金の大 部分をつぎ込んだため、某役員に電話で怒鳴られた。その時辞任を表明し、た またまカナダ政府の留学生募集があったので、これに応募することにより、連 盟とのつながりを切った。監事の門脇さん(札鉄)に会計監査をして頂いたの は1回だけであるから、私が事務局を担当したのは1年位にすぎなかった。門 脇氏は鉄道局の一室で会計簿に印を押しながら「会計規模が50万円にもなるの だから、1人では大変であったでしょう」と労って下さったのを覚えている。 2度と連盟に関係することはないと思っていたが、弘大から北大に赴任した後、 **先輩、後輩の御蔭で連盟の役員にして頂き2回目の北海道国体にも参加した。** 乗馬団体の数も随分多くなり、連盟の規模が驚く程大きくなっているばかりで はなく、確実に機能していることがよく判って心強い限りであった。

当時、北海道体育協会10年史の発行が計画されており、道体協の依頼で馬術史、本道における開拓時代からの乗馬の歴史、乗馬連盟の発足と現況、道内外における本道選手の活躍を示す詳細な大会記録、将来の目標など、可成りの量の原稿を書いた。その一部は道体協30年史に載っているようであるが、10年史はついに発行されなかったばかりでなく、完璧な大会記録と自負している原稿が消えてしまったのは惜しまれる。この幻の10年史の中で、連盟の目標として、経済的な基礎の確立とオリンピック選手の養成をあげた。北大馬術部〇Bの千葉幹夫氏が2度のオリンピックに出場しているが、乗馬連盟が育てたとはいい難い。現在は、優秀な高校選手も多数活躍しているから、この目標が達成される日の早いことを祈っている。

馬と付き合って50年

北大乗馬同好会 佐 合 義 弘

連盟から原稿をと依頼されたが、はて、なにを書けば良いのだろう?私は札幌乗馬クラブに席を置いた期間は全く短く、もっぱら北大乗馬同好会で学生の皆さんとのお付き合いの方が長い、通算すると今年で約38年になる、それも東京に転勤して約10数年は所沢乗馬クラブで、そして北京勤務になって5年間は在北京日本人会の中に乗馬同好会を設立して蒙古馬に乗っていた。現在はまたまた北大乗馬同好会でお世話になっている。

私と馬との付き合いは昭和15年の第五次「満蒙開拓青少年義勇軍」で旧満洲 の最北端「嫩江県」の伊拉哈訓練所に入所してからのことである。

当時私たちの様な少年がぞくぞくと旧満洲に送り込まれた。特に長野県はその数も他県より多く、移植と称して開拓団が旧満洲に向かって入植して行った。 当然にも当時の農業はトラクターもさる事ながら「馬」は欠かすことの出来ない私たち開拓の仲間だった。

私たちの訓練所も昭和16年6月に日本馬が10頭来た、この時、私も日本馬当番となり、当たったのが「初浪」という馬だった。この馬、輸送中に他の馬に右後足の飛節の上のあたりを蹴られて6月と言う事もあって既に患部が化膿していた。この傷は完全に治るまで結局秋までかかってしまった。

今まで馬など扱ったことのない私にとってやる事、成す事すべて初体験、殆 ど毎日厩舎に泊まり込んで「初浪」と言う馬と付き合った。この事が私に馬と 言う動物がどんなものであるかを良く分からせてくれた。

昭和30年に帰国して札幌に来て北海道大学馬術部の馬に乗せていただくことになり、乗馬同好会の一員として今日まで席を置かせてもらっている。

昭和49年から約1年間ばかり札幌乗馬クラブの専務理事を担当させていただいたがこの時の思い出はクラブそのものの存続や、競馬場との関係やら、財政的に困難だったこと、そして現在の北星乗馬クラブの馬が行くところがなく、我々のクラブの馬すら当時は札幌競馬場のお世話になっているところに、そこへ入って来たものだから競馬場との関係も複雑になってしまったと記憶してい

る。

当時の乗馬クラブの決算は連続赤字つづきで結局個人的な持ち出しも仕方なく、クラブの馬の行き先を探すどころかその暇すら無かった。

そうこうしているうちに私は東京への転勤が決まって慌ただしく開催した理事会で専務理事のなり手もなく困り果てていたが結局は村上さんにお願いすることとなり、私は後ろ髪を引かれる思いを残したまま東京に転勤してしまった。今でも申し訳なく思っている。

この『札幌乗馬クラブ』はもともと札幌鉄道管理局に勤めていた山本さん始め『札鉄乗馬クラブ』の方々がご苦労なさって手に入れた『法人格』だったと記憶している。

話しは変わるがこの50年間で馬と付き合い、馬を中心にした多くの人々との 親交を深められたことは私の人生にとっても非常に意味深いものであった。

第一に忘れられないのは私が義勇軍開拓団にいたとき旧満洲の大連近くに (今は飛行場になっているが)周水子(しゅうすいし)というところがあって、 ここで日本から調達してきた日本馬が集められ調教・訓練し大陸の各地に供給 されていた。当初は関東軍が直接調教・訓練していたが昭和16年になるとその 調教・訓練のおはちが我々義勇軍に回されてきた。私たちの訓練所にも10名の 割り当てがあって私もその一人として周水子に行かされてここで約半年いやと 言うほど鍛えられた。後で聞いた話しだがここにかの有名な遊佐幸平先生が責 任者としておられたとの事だった。

第二は克山農事試験場に農業気象の勉強に行っていたときのことである。ここには関東軍の克山独立守備隊があってここの隊長が大谷隊長だった。隊長は頻繁に私たちの農事試験場に馬に乗って来ていた。私はこの時とばかりに隊長の馬に乗せてもらっていた。この隊長の馬当番の方が元競馬の騎手だったそうで私はこの方から乗馬の基本を教えていただいた。以来終戦まで時には隊長の方から馬に運動をさせてくれと頼まれて私は喜び勇んで公用と称して守備隊まで行ったものだった。ところが私が昭和31年に帰国し北大生協に就職したころ獣医学部の付属病院の院長が同じ名前の大谷先生で私は思わず電話をし『先生は旧満洲の克山にいたことがありますか』とお尋ねした、すると『いたよ』と

のお答えで、私は『では独立守備隊でしょうか』、『佐合ですが覚えておられるでしょうか』、すると『なんだ佐合君か今どこにいるんだ』と言う事で話ははずみとうとう先生の家までお邪魔して時間を忘れて克山の話に花が咲いた。その後体を悪くされ故郷の静岡の方に帰られた。

人間生きていればどこでどの様な奇遇なことに逢えるか分からないものだ。





畜大の学生の頃

中曽根宏

古い馬術部のOBの皆と同様、私にも馬輸送の思い出がたくさんありますが、道馬連との付き合いも、畜大2年目の時、34年の東京国体の貨車輸送から始まります。経堂の駅で馬を降したのが朝のラッシュアワー、駅のまわりの道路は人で一杯。その中を一週間振りに狭い箱の中から出されて跳ねまわる馬に乗って馬事公苑まで行きましたが、4人で6頭を連れて行ったので、そうとう緊張しました。この時その後、何度か上乗りを一緒にした「おんちゃん」こと札競の高橋留次郎さんにいろいろ輸送技術を教えてもらい、以後我々はプロも驚く輸送屋になりました。

36年春、当時副将だった鷲田と二人で道馬連の会議に出席、国体予選の初めての帯広開催を申し出ましたが、当時、定期戦を行なっていた北大と札鉄以外帯広の状況が分からず、「帯広でそんな大事な大会が出来るのか」とか「原っぱでロープを張った様な所で大会は出来ない」とか言われてなかなか相手にしてもらえず、だいぶもめました。北大の応援があって、やっとOKとなったが、「どうせろくな障碍はないだろうから札幌から持って行くから貨車を用意すること」の条件が着いて、こちらも「それなら練習用にお借りしましょうか。」など言って、しっかり稽古をつけられた感じでした。のちに鷲田が道馬連に入って色々やった原点はここにあった様に思います。実際には、前年全日本学生王座決定戦(現全日学二回走行の前身で、当時からNHK-TVの中継があった。)に勝った記念に、70m× 140mの新設した馬場で、道内の試合で初めて審判席を高くしたりして、大好評の大会をやり、翌年も又、帯広開催となりました。

毎年国体出場が決まると資金調達が大変で、道馬連から割当が5万円くらいでしたが、学生のバイト代が1日5百円、ラーメンが5、6十円の頃、1口5百円ずつでは、なかなか目標には達しませんでした。この寄附集めに特にお世話になった人に、帯広の市議で山田勇太郎さんという人がいました。36年の国体開催地、秋田の角館が郷里の山田さんは応援に行かれることになったので、

学生で考えて、北海道帯広選手団団長をお願いしました。福島の全日本から角館へまわった我々は、山田さんに宿に呼ばれて驚いた。角館一番の旅館の入り口に「大会本部役員様御宿」と書いた横に、それより倍もある「北海道選手団団長、山田勇太郎様御宿」との大カンバン。試合の方は、碧雲、洋孝の活躍で、最終日の出来いかんでは優勝もあるかも知れないということになってきた前日、大木さんに「明日は用事があるから、表彰式は山田さんに出てもらえ」と心遺いをしていただき感激。結局東京と同点優勝となり、山田さんには親戚、知人の多数集まった中で、北海道選手団を代表して賞状を受けてもらい、お世話になった幾分の一かのお返しが出来ました。

この年は暮に昨年に続いて王座戦に勝って、以後数年は遠征資金を集める苦労がなくなりました。

元専務理事故鷲田和彦君の事

故鷲田和彦君について一番近くに居た仲間の一人として書いておかなければ なりません。

46年頃の事と思いますが、国体の成年貸与馬の選手がいつのまにか決っているという事があり、これを知った鷲田達が猛反発をして、予選からやり直しをすることになり、馬からはなれて田舎で百姓をやっていた私にも召集がかかりました。これを期に色々馬連の事を調べる事になり、その結果「連盟の運営と会計に問題がある。これを正常にする為に俺は馬連に入る」と鷲田が決めて、我々が応援することになりました。

当時馬連には連盟を運営してゆくのに必要な規約、規則とお金がありませんでした。決まりがないから、一度決定されたことでも次の理事会には別の事に変ってしまう事が度々ありましたし、会計処理についても加藤監事に叱られてばかりでしたので、まず規約規則作りをやりましたが、素人ばかりでずいぶん時間がかかりました。

鷲田が馬連運営の企画遂行する立場になった時は、特に大切と考えたことが 二つあります。

一つは会計処理を明確にすることと節約をして連盟に金を残すことで、もう 一つは大学の馬術部のことでした。馬連としては当然、「競技力の向上、馬事 思想の普及」といった目標があるわけですが、これを実施するには大学馬術部 の協力が絶対必要であり、そのためには彼等がやりやすい様に力がつく様に、 計画を組むことを心掛けたのです。実際の運営には、彼自身家業を継いだばか りの大変な時だったにもかかわらず、「金がなければ人間が動けばいい。」と 先頭になってバリバリ仕事をかたづけていました。又、若いのに、気くばりが 出来て他人の面倒を良くみたので、「社長の言うことはなんでもきく」という 人が彼のまわりはたくさんいて、国体の遠征資金が足りないと聞けば、馬の輸 送を引き受けてくれたり、試合場の整備に重機で手伝いに来てくれたりといっ た、馬に直接関係のない人達の多くの協力がありました。その結果、使わなか ったから残ったというお金で基金も出来ました。その基金も毎年少しずつ増え てやがて「溜めるばかりでなく、使うことも考えよ」と加藤監事に言われる様 になった頃国体の北海道開催が決まりました。その最初の強化案を作りかけで、 彼は突然亡くなってしまいました。本当に惜しい事でした。彼がやらなくても 馬連はどこかで変ったでしょうが、あの馬力がなければ変るためにずいぶん時 間がかかったでしょう。だんだん彼を知らない人が多くなってきました。我々 はKW記念メダルと共に馬連に対する彼の思いを伝えていかなければと思って います。

馬場勝手なるべし!

高田龍馬

◆昔、札幌競馬場に通っていた時代がある。

私は若かった。そして、皆も若かった。

「大木さん」と「高橋さん」のお2人、そして、「洋孝」と₁「雅竹」という2頭の馬。

彼らは、戦後10数年ブランクだった私の乗馬人生を復活させてくれた、という意味で「大恩人」である。今、あの時から30年は経っているがまるで昨日の事のように、色々なことが頭に浮かんでくる。

昔の札幌競馬場の事務所に初めてお邪魔したのは昭和35年頃だった。正門から角馬場を右にみて、正面玄関を入る。左手の古びたドアーを開けると事務所がある。ストーブを囲んでいた数人がおしゃべりを止め、突然の闖入者に目を向ける。

「馬に乗せて頂きたいのですが……」

誰に尋ねるべきか分からないから、皆の顔を等分に見渡しながら私は尋ねた。 一瞬の沈黙を破ったのは、背の高い人だった。

「いいですよ、でも、どの位乗るんですか」

最近なら、100鞍位ですとか、2課目位ですとか、ある程度は相手にこちらの技量を推定させる表現の方法がある。しかし私は何と答えて良いか分からない。

「終戦後は、数回しか乗ったことがないのですが……」と曖昧な答えになってしまった。

「それじゃ、戦前には乗っていたという事ですね」と問い正されてしまう。 仕方がないので説明に入る。子供のときは、鎌倉のクラブで乗っていたこと、 先生は武藤さんといって主馬寮出身の調教師で、お酒が原因でクビになったが、 腕は一流だったのでクラブの教官になったこと、などなど話は飛躍する。

私の話が「酒飲みだが腕はいい」、というクダリになると、数人の中の目の ギョロッとした人が「ガーハッハッハ」と豪快に笑いだした。腕が良いのか、 酒が好きなのかは分からないが、私は自分の話を続けた。

結局この日は馬に乗せて貰えなかった。というより、話の輪に入ってしまったので、気が付いた時は暗くなっていたのである。

背の高い人が大木さんで、ギョロ目の人が高橋さんである。(後で知ったことだが。)これが切っ掛けで、私と大木さんのお付き合いは始まった。

その後の数年間、随分とお世話になった。自分だけで勝手に乗った時もあったが、懇切丁寧に指導して頂いたものである。

が、どういう訳か、一円の指導料も受け取って下さらない。会費は勿論、いか なる名目にせよである。ある日私は考えた。そして正門前にあった馬糧屋さん を訪ね、燕麦数俵を匿名で競馬場に届けて貰った。これで私の心は安らいだが、 競馬場では困ったらしい。馬糧屋さんも聞かれたらしいが私の名前を知っている訳ではない。でも結局、犯人は私らしいと見当を付けたのだろう。「競馬場には競馬場としてやり方があるので……」という大木さんの発言から、かえって迷惑をかけてしまった事を悟ったのである。私の勝手さは、今も昔も変わらないようである。

やがて私は東京に転動し、その後20年程札幌を訪れる機会に恵まれなかった。 そして昭和も終りの頃、懐かしの競馬場を訪ねたが、昔の面影を残している場 所を見付けることはできなかった。

私の後を追うように、大木さんも東京に栄転され、「乗りに来い」、と何度 もお誘いの電話を頂いたが、いつも仕事に邪魔をされ、東京では教えて頂く チャンスが無かった。

又、成長した道子さん(娘さん)の乗馬姿に接する機会も無かったのである。 その後いつだったか、20何年ぶりかで道子さんと逢ったが、「覚えています わ。雅竹に乗ってらした高田さんでしょ?」と言われ、思わずニヤリとしたも のである。傍らの大木さんは温和な表情で、私達の会話を聞いておられたが、 母親になった道子さんを見守る彼の瞳には、少女の時の道子さんに対するのと 同じような、暖かい光が籠もっていた。

札幌競馬場で乗っていた時代に話は戻るが、大木さんがいない時等は、高橋さんが教えてくれた。「おんちゃん」の愛称がピッタリの人物だ。あれは雪解けの頃だった。名前を忘れたが大きな体の障害馬に乗せられた。冬場の運動程度に乗るのかと思っていたら、何と障害を飛べという。しかもメートル以上はある「俺、遠慮するよ」と言ったが聞いてくれない。結局、馬が飛んでくれて無事終了。今では懐かしい思い出の一齣として、記憶のフイルムに残っている。近年、競馬場を退職されたそうだが、是非お目にかかって当時のお礼を言いたいものである。

「雅竹」は大竹さんという、札幌では有名な旅館経営者の預託馬だった。ご本人が私に乗れというものだから、専らこの馬で練習していたが、少々腰の弱い所があったのを覚えている。しかし、パッサージュ程度の調教は受けていて、勝手乗りの時には大いに楽しませて貰ったのである。

ある日、北大馬術部のエースが乗りに来た。今は、日馬連で活躍中の千葉さんである。大木さんと鎌田牧場の鎌田さんも加わって彼の演技をみていたが成程うまい。しかし、鎌田さんは先輩だから遠慮がない。当時は斜線上の横歩と呼んでいたと思うが、ハーフパスの後駆が先行する点を注意しておられたのを覚えている。しかし、そこは千葉さん、2回目には正しくやってのける。「栴檀は双葉より香ばし」という諺を思い出すシーンであった。

◆ヨーロッパで学んだことは多かった。

昭和42年春、私はオランダに転勤になり、あこがれのヨーロッパで馬術に接 するチャンスに恵まれた。

赴任して間もないある日の午後だった。

休暇をとっていたはずのオランダ人の職員が書類をもって私の事務室に入ってきた。仕事熱心なのはいいが、乗馬スタイルである。

「何だ、その恰好は……」と問い正すと、早朝からの特別訓練に参加していたが、どうしても急ぐ仕事を思い出したので出てきたという。馬が大好きな私のこと、書類にサインをして仕事はすんだが彼を帰さない。どこで練習している…?何年乗っている…?等々詳しい話を聞き出した。そして、ミスター・タカダも乗馬をするのか、ということになり、次の日曜日には、彼の先生に紹介して貰う約束ができた。

その先生は、ナショナル・チームのコーチをやっているベテランで、彼が所属する乗馬クラブの会員になり、約4年にわたって色々と教えて貰ったのである。

サンデー・ライダー(日曜日だけの生徒)だから、という訳ではないだろうが、1日に4鞍のレッスンは厳しいものだった。午前中は新馬に乗り、主に調教の手順を習い、午後は古馬に乗って馬場の練習をした。その練習は常歩から始まるが、ゆったりと大股に歩かせるのが一苦労、先生は、普段は英語で話すが怒るとオランダ語になる。外国人の私には益々解らなくなる。最後は先生がやってみせてくれる。「お前のはこうだ、正しいのはこうだ」とやられると、明らかにその違いが出てくるから堪らない。でもお陰様で、自分の馬術がいかに未熟なものであるかを知らされた。

クラブの競技会があった時、審判をする先生の助手をやらされたことがある。 点数を付けるだけなら楽なもんだ、と思ったら大間違。お前も書け、と言って 用紙を渡される。問題は全ての演技が終わってからである。先生のオフィスへ 呼ばれて自分の採点したリストの説明をさせられる。どこが良いか、どこが悪 いか、だから何点をつけました、と報告するのだが、先生と同じ点数が付いた のは半分もない。本当に情けない思いをしたものである。

だが、この時私が学んだのは、馬がどの様に自然に動いたか、どの程度、乗り手の要求に応じたか、という点を見るのが大切だ、ということであった。よく調教された馬に乗れば、ある程度、良い点がとれるのは当たり前である。が、馬の動きを妨害するような扶助があると減点される。あまり調教の進んでいない馬に乗った人とのバランスをとっているのかも知れないが、この辺が選手権大会などと違う点なだろう。

そう言えば、クラブ内の競技会では、騎手のレベルによって採点基準を変えていたのが面白い。ある馬場の課題が 100点満点だったとする。同じコースを踏む初心者の満点は20%引きの80点、中級者のは10%引きの90点としてで採点するのである。だから上級者がいつも優勝するとは限らない。よく調教された馬に乗った人が勝つとは限らない、というアイデアが面白い。

◆勝手なことも、言いたい放題。

60歳の定年が近づいた時、私は北海道に永住するべく札幌に住宅を購入した。 これで本当の道産子になったような気がした。しかし、馬はやっぱり中間種が 好きだ。

ヨーロッパにもサラブレッドの乗馬はいたがどうも扱いが難しい。中間種のいい馬に巡り合いたいが、日本でそんな贅沢は許されない。仮に幸運に恵まれたとしても、今は私の体力が続かない。全く人生はままならぬもの、と思うのは私だけではなかろうが、上手下手は別として、私より年配の方が、熱心に乗っておられるのをみると、心から尊敬してしまうのである。せめてあの方達の半分でもいいから乗りたいもの、と思ってはいるが、実行できるのは、口頭馬術だけである。

もっと勝手なことを言わせてもらおう。

戦後の日本は、経済的な面では(少なくとも表面的には)世界有数の力を持つ大国に成長した。しかし、馬術の面では(誠に残念ではあるが)後進国並みであることを認めざるを得ない。

これには色々な理由があるのだが、私が最も強く感ずるのは、乗馬人口の絶 対数が少な過ぎるという点である。

大体、繁栄するスポーツには幾つかの特性がある。例えば、子供時代に経験 した野球や水泳、スキーなどは、大人になっても楽しめるから廃(スタ)れな い。

一方、子供のファンが多いスポーツは成長する。サッカー等は良い例だろう。 自分ができなくとも、見る事だけが楽しみのスポーツもある。相撲やプロレス等が良い例だが、乗馬の場合とは格が違う。

日本とヨーロッパは、その歴史や風土などに大きな違いがある。だから単純 に比べる事はできないが、ヨーロッパの子供たちにとっての乗馬はごく普通の スポーツである。

日本の子供達が、水泳教室に通うのと同じ感覚で乗馬クラブへ通っている。 だから大人になって、乗馬を止めた人でさえ、乗馬の楽しさを知っている。 大人になっても乗馬を続けている人が多いのは当たり前の話である。

乗馬人口が多ければ、乗馬クラブの経営も楽になる。底辺が広いから、強い 選手の育成が容易になる。遠隔地の競技会への派遣も楽になる。

誰でもが知っている事なのに、何故、誰も普及活動に取り組まないのだろう。

「ローマは一日にして成らず」というではないか。初年度は50人を目標に、各クラブが協力してはどうだろう。道馬連とか、振興協会からの補助金も不可能ではないだろう。

人材には恵まれている筈。乗馬の世界に明るい未来があることを祈念して止まない。

北海道乗馬連盟創立の歴史

1 北海道乗馬連盟創立の背景

(1) 北海道と馬の関係

この関係は基だ密接で、北海道開拓以来、農耕、輓曳輸送、駅逓などに極めて重要な役割を担っていた。

文化年間、函館奉行の戸川安倫が南部産馬数頭を有珠虻田地方に移し、牧 馬場を開始し、安政年間には日高浦河地方に牧馬場を開いた。

開拓使設置以来、種馬をアメリカその他から輸入し、新冠牧馬場を設けて 品種の改良に努め、北海道庁設置後には北海道種畜牧場においても改良育成 が進められた。

また、早くから軍用馬の生産育成にも力が注がれ、明治33年には釧路に、明治40年には上川に陸軍省所管の軍馬補充部が設立され、馬政局が出来てからは日高、十勝、長万部に種馬牧場が設置され、馬産地としてますます重視されるようになった。

したがって、道民は馬に接する機会も多く、乗馬や馬術その他馬事に関する興味や知識を持つ者が多かったものと推察される。

(2) 軍隊馬術

屯田兵時代に続いて、明治29年(1896)札幌に陸軍第七師団が置かれ、同 32年には月寒に歩兵第25、26、27、28連隊と輜重隊が、同33年には騎兵隊が 設置された。

しかし、同じ年に歩兵は第25連隊のみを残して他は旭川に移駐されたが、 工兵隊、野砲隊が加えられ、多数の軍馬が繋養されて、良く調教された優秀 な乗馬も多かった。

師団では、国防の立場から、一般民間人や学生に対し、馬事思想の普及宣伝のために積極的に軍馬の使用を許可し、優秀な将校や下士官の乗用馬を提供し、馬術に優れた将校、下士官、調教師が教官となって指導にあたり、土曜、日曜、春・夏休みには営内宿泊も許した。

昭和2年から、師団主催の北海道乗馬大会が毎年旭川で開催され、出場者

は乗馬部隊の将校、下士官が主であったが、一般及び学生を対象とした競技種目もあり、個人及び団体戦も取り入れ、当時としては盛大な競技会で、昭和16年頃まで続けられた。また、騎兵学校の教官による模範馬術の供覧も行われた。

(3) 学生馬術

札幌農学校では、明治初年開校当時から農場に馬を繋養し、畜産学、獣医学、蹄鉄学、馬耕乗馬の実習教育が行われていた。

明治10年(1877)帰国するクラーク博士を校長と3人のアメリカ人教師と全校学生の総勢25騎が、室蘭街道を南へ20㎞の島松駅逓まで見送り、最後に博士が馬上で学生に「ボーイズ・ビー・アンビシャス」と叫ばれた馬上の訓言は有名である。

北海道大学では、太平洋戦争の中頃まで乗馬を繋養して畜産学科と農学科の学生に正課として馬術を教えていた。

これとは別に、一部の学生が大正14年に北大乗馬会を設立し、月寒の歩兵 第25連隊の将校乗馬で調教師を教官として練習し、休暇には旭川騎兵第7連 隊で合宿練習を行っていた。

これが、現在の北海道大学馬術部(昭和5年創立)の前身で、本道学生馬 術団体の先駆である。

その後創設された帯広高等獣医学校の騎道班(昭和17年)、即ち現在の帯 広畜産大学馬術部と共に、全国的にその輝かしい足跡を残している。

また、昭和の初期に旭川で中学生が軍隊で練習を始めていたという伝聞もある。

(4) 社会人馬術

明治5年(1872)、札幌神社の祭礼に乗馬で参詣した人たちが、祭礼を祝って競馬をした。これが札幌競馬の始まりで、開拓使の勧業課が主体となって競馬が開催されていた。

既に、明治40年頃に北海道乗馬会という団体があって、札幌競馬を開拓使から引き継いで実施していたが、後に北海道競馬会となり、現在の札幌競馬場の位置に競馬場を移し、札幌競馬倶楽部となったが、昭和12年に日本中央

競馬会に統合された。

戦時中昭和18年に競馬が中止されたが、昭和21年進駐軍が慰安的な催しとして開催されており、昭和22年札幌競馬が再開されるにいたって、札幌競馬場では進駐軍の使っていた馬の一部を場内に繋養し、札幌乗馬倶楽部の会員や北大馬術部の学生に馬術練習馬として提供された。

大正の終わりから昭和の初めにかけて、道内の諸所に馬術愛好者や騎兵隊 などの出身者によって乗馬倶楽部が創設されたが、これらの中には発展した ものもあり、消滅したものもあるが、それぞれ本道の馬術界の発展に寄与す るものが大きかった。

その一例が、武田忠幸氏らによって創設された札幌愛馬会は、一般会員及 び学生会員に馬術を指導していたが、これが現在の社団法人札幌乗馬俱楽部 の母体である。

また、遊佐幸平先生から、恐らく世界で唯一であろうと誉められた女性ばかりの銀鞍クラブ(当時原島つる子会長)は、一時は盛んで、第9回国体には選手を送り大いに気を吐いたがその後一時解散し、昭和43年頃銀鞍会として再開したが、現在は惜しくも消滅している。

2 北海道乗馬連盟の設立と沿革

(1) 創設当初設立総会

上述のように、北海道における乗馬並びに馬術の歴史は古く、学生の馬術部、社会人の乗馬クラブなどの団体、または、同好の個人など次第に数が多くなり、全道的あるいは全国的馬術競技会に出場して好成績をあげる者も多くなってきた。しかし、各団体が一致して連盟を結成するまでには至らなかった。

丁度そんな折り、昭和29年(1954)に第9回国民体育大会が本道で開催されることになり、馬術競技を開催する組織の必要に迫られて、その前年の昭和28年10月に北海道乗馬連盟が結成された。

連盟の最初の事業は国体に使用する乗馬の選択購入と競技用馬とするために調教することであった。

発足当時の役員は、主として札幌乗馬倶楽部の役員が兼任したが、翌29年 5月15日の設立総会において2~3名追加し正式に決定され、連盟の規約も 総会で決定された。

連盟の事業としては、道内における騎乗競技の実施、乗馬の普及、乗馬家の連絡及び親睦を図ることのほか、乗馬に関する各種業務を行うと共に、日本馬術連盟の業務に協力することを目的とした。

事務所は、日本中央競馬会札幌競馬場事務所に置き、競馬場職員の山下輝幸、姉崎保の両氏が事務局を担当した。

当時の役員

会長:菊池吉次郎(北海タイムス社長:現北海道新聞社)

常務理事: 庄内貞夫、武田啓介、原島つる子、遠山範重、松本久喜

理事:太秦康光、河村悌一、高橋賢一、渡辺鉄太郎、中本明、大久保俊

彦

監事:小関勇、武田忠幸、野久保秀三

(2) 第9回国体開催の頃

設立総会の1週間後、第1回の理事会が開かれ、当年(昭和29年)8月24、 25日両日の国体を成功裡に終わらせることを至上任務とし、具体的な打ち合 わせが行われた。

前年末、すでに購入した馬は競馬場の厩舎に繋養され、在札の乗馬関係者 一同協力して調教に当たっていた。日本馬術連盟から派遣された元橋忠作、 荒川米吉両氏の指導を得て調教は順調に進んだ。国体は、関係者一同の協力 で無事遂行することができたが、北海道の成績は芳しくなかった。

その後、連盟役員は太秦理事が副会長に就任、他に2、3の異動があったが、菊池会長が東京に移られた昭和36年(1946)までは殆ど留任した。

この間、連盟は特に北海道大学馬術部、同OB、札幌乗馬倶楽部、札幌鉄道管理局馬術部、帯広畜産大学馬術部、日本中央競馬会札幌競馬場の支援により運営されたが、札幌競馬場の山下輝幸(元小野寺)氏と北大OBの斉藤善一氏のご努力は特筆される。

(3) 連盟隆盛期

昭和37年菊池会長に代わって、高橋賢一氏(道議会議員)が会長となった。 太秦副会長が函館に転出したため、副会長に武田忠幸、松本久喜、安部康 毅の3氏が就任、理事長に庄内貞夫氏、理事は異動があって14名(山本智氏、 大木正巳氏、斉藤善一氏、小野寺輝幸氏、原島つる子氏、重信実氏、穴田正 一氏、市川瑞彦氏、原重一氏、半澤道郎氏、鷲田和彦氏、鶴見利司氏、清水 義作氏、北田満之進氏)、監事には門脇佐一氏、白瀬繁二氏が就任した。

この年、連盟事務局を北海道大学農学部畜産学科内に移し、斉藤理事が事 務を担当した。

当時の加盟団体会員は、学生は北海道大学馬術部、帯広畜産大学馬術部、 酪農学園大学馬術部の3大学、社会人は札幌、旭川、帯広の各乗馬倶楽部、 札幌鉄道管理局、札幌競馬場の各馬術部と北大職員の乗馬同好会などの11団 体で、このほか高校馬術部4校、合計18団体であった。会員総数は287名で、 内訳は学生生徒が140名(女性15名)、一般147名(女性子14名)であった。

昭和39年(1964)には、松本、安部副会長に代わって半澤道郎氏が副会長に就任し、理事、監事にかなりの異動があった。事務局を札鉄公安室に移した。

北海道乗馬連盟役員名簿(昭和39~40年度)

会 長 : 高橋 賢一

副会長 : 武田 忠幸 半澤 道郎

理事長 : 庄内 貞夫

理 事 : 中松喬三郎 原島つる子 飯守 義正 高橋留次郎

山本 智 今井 正 布浦 敏一 南波太四郎

斎藤 守 田中 一郎 滝沢南海男 横田 肇

北田満之進 志賀 親則 板東 良一 石井幸次郎

小山 昌克 大原 久友 清水 義作 都築 俊文

伊藤 宏

監事: 門脇 佐一 稲垣 新一

またこの年度から新しく顧問を次の諸氏に依嘱した。

北海道知事 町村金五、北海道議会議長 岩本政一、北海道市長会会長原田与作、北海道町村会会長 箕輪早三郎、自衛隊北部方面総監 宮崎舜一、北海道大学学長 杉野目晴貞、酪農学園大学長 山極三郎、札幌競馬場長桶師治朗、北海道大学農学部長 長尾正人、北海道馬事協会会長 早川由太郎、北海道畜産会会長 山中良造の各氏。

昭和42年(1967)には、副会長を4名とし、理事を各団体から1~2名を選び、25名とし、理事長に山本智氏、監事に星野良平氏が就任した。また、事務局を札鉄公安室から北大農学部に移し、半澤副会長と山本理事長が事務を担当した。当時の加盟団体は、前期のほかに丸井今井デパート乗馬倶楽部、銀鞍会、大谷学園札幌女子短期大学馬術部、北海道女子短期大学馬術部などを含め17団体で、会員概数 401名(女性 121名)、所有馬54頭に及んだ。

昭和44年学内紛争のため、事務局を山本智宅に移し、山本夫人の援助のも とに自宅で事務を処理したが、昭和48年転任のため退任、西村札幌競馬場長 の好意により事務局を再び札幌競馬場に移し、西村場長が副会長と理事長を 兼任された。副会長にはこのほか武田忠幸、宮坂文一、小山昌克、監事に畠 山五郎、佐合義弘の各氏が就任した。また、初めて総務部および競技部をお いて、理事でその任務を分担した。

この年新たに岩見沢乗馬クラブ、井上乗馬倶楽部、北星乗馬同好会、札幌 楽馬会、北海道工業大学馬術の入会があり、函館乗馬クラブが退会した。

昭和49年には、半澤道郎氏が理事長に選任され、総務担当の小野、片寄理 事等の援助と、この年度からパートの女性事務員を雇って競馬場に連盟専用 の部屋を借用して事務処理をした。

(4) 連盟改革期

昭和51年4月総会で、創設以来の連盟規約を改正し、4月1日から施行した。昭和52年には、第15回日韓親善馬術大会の準備の都合もあって、鷲田常任理事の店の事務室に一部事務所類を移して、しばらく事務処理を行った。この年、監事に加藤弘氏が就任した。

昭和55年(1980)には、理事長に岡田光夫氏が就任し、副会長に半澤道郎 氏と宮田四郎氏が就任した。

北海道乗馬連盟役員(昭41~42)

(役名)	氏 名	住 所	所 属			
会 長	髙橋 賢一	有珠郡伊達町北黄金	北海道乗馬連盟			
副会長	武田 忠幸	札幌市南6条西20丁目	札幌乗馬俱楽部			
"	半澤 道郎	″ 北6条西12丁目	北大乗馬同好会			
"	庄内 貞夫	″ 白石中央通53-3	札幌乗馬俱楽部			
"	石井幸次郎	旭川市10条8丁目右5号	旭川乗馬俱楽部			
理事長	山本 智	札幌市北10条東6丁目213の401	札幌鉄道管理局馬術部			
理事	原島つる子	″ 北2条西27丁目	札幌乗馬俱楽部			
"	布浦 敏一	″ 新琴似町446の 6	札幌鉄道管理局馬術部			
"	髙橋留次郎	″ 北14条西19丁目	日本中央競馬会札幌競			
"	南波太四郎	〃 澄川420角	馬場・サデパート乗馬俱			
"	斎藤 守	″ 白石町中央448	米 耶 			
"	佐合 義弘	〃 琴似町東8軒753	北大乗馬同好会			
"	板東 良一	旭川市6条通12丁目	旭川乗馬俱楽部			
"	井上 忠吉	″ 近文町25丁目	"			
"	清水 義作	帯広市西6条南11丁目	帯広乗馬俱楽部			
"	千葉 滋	″ 西17条南1丁目ERC-117号	"			
"	太秦 康光	函館市湯川町 2 - 8 - 2	函館乗馬俱楽部			
"	平 弥三郎	″ 大森町20番 6 号	"			
"	八木 正巳	札幌市琴似町8軒5条東1丁目	札幌光星高校馬術部			
"	山崎 善輝	〃 北3条西21丁目 よしの荘	札幌竜谷学園札幌女子 高校馬術部			
"	西村 忠彦	帯広市稲田町 帯広農高公宅	帯広農業高校馬術部			
"	橋本 和雄	"	"			
"	須藤 正之	" 稲田町 帯広畜産大学碧雲寮	帯広畜産大学馬術部			
"	山下 太郎	"	"			
"	杉山 光	江別市西野幌763 五十嵐方	酪農学園大学馬術部			
. "	鶴林 正貴	〃 野幌町69の22 中井方	"			
"	一見しづ子	札幌市琴似町宮の森743	札幌大谷学園女子短期 大学馬術部			
"	高谷由美子	″ 東苗穂町83	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\			
"	五十嵐 章	″ 北9条西13丁目 進修寮	北海道大学体育会馬術部			
"	山本 紘明	" 南11条西20丁目	"			
監事	星野 良平	" 南3条西6丁目	札幌乗馬俱楽部			

北海道乗馬連盟加盟団体(昭和42年)

団 体 名	事	務	局	代	表	者	会員数	所有 馬数
札幌乗馬俱楽部	札幌市北国鉄パート			武田		幸	20(0)	6
札幌鉄道管理局馬術部	札幌市北札幌市鉄			古泉	、	(—	24(3)	-
日本中央競馬会札幌競馬場馬術部		競馬会札	晃競馬場	松山	事	き朗	10(0)	7
毋今井デパート乗馬俱楽 部	札幌市南 ⊕が−ト、第	第1外商課	、斎藤守	南波	太区	息	13(7)	-
北海道大学乗馬同好会	札幌北 9 北大農学	部、半澤	気付	半澤	建道	愈	30(10)	-
旭川乗馬俱楽部	旭川市花旭川乗馬	俱楽部(井	上忠吉)	小山	1 [克	50(20)	4
带広乗馬俱楽部		内(笹川	逄)	清水	《	锋作	40(10)	2
函館乗馬俱楽部		平弥三郎	気付	太秦	達	老	30(10)	3
銀 鞍 会	札幌市北 原島つる	子方			うつる		15(15)	-
北海道大学体育会馬術部	札幌市北 北大、第	• • •	丁目 :		澤道的	\$彦 耶)	60(10)	6
酪農学園大学馬術部	江別市西		<i>,</i>		下正		21(2)	5
帯広畜産大学馬術部	帯広市稲帯広畜産		寮内	皇山三	• .] 明 券)	29(1)	14
帯広農業高等学校馬術部	内带広市	稲田町		橋本	不	雄	10(0)	4
光星高等学校馬術部	札幌市北	13条東 9	丁目		: I		5(0)	1
大谷学園札幌女子短期大 学馬術部	札幌市北	16条東 9	丁目		」るる 島義明	-	9(9)	-
札幌竜谷学園札幌女子髙 校馬術部	札幌市北	3条西19	1目	山崎	善	锋輝	15(14)	2
北海道女子短期大学馬術部	江別市西	野幌720		渡部(南	部忠]	色子 平)	10(10)	-
以上 17 団 体		:	会 員 娄	牧 概	算		401 (121)	54

()は女子

この年の理事会において、理事の数があまりに多く理事会の召集、議事の進行にも支障があることから、役員の数を減らして運営することが提案され、昭和56年4月の総会に諮って、暫定的に仮称拡大役員会の設置が決定し、高橋会長、半澤、宮田副会長、岡田理事長、加藤監事、鷲田、村上、小野、荻野、庄内、鎌田、中曽根の各理事が会長から指名され、新しい組織づくりを行った。

昭和57年の総会において、新しい連盟会則が決定され、理事数を減じ、新たに評議員の役職を採用し、加盟各団体から1名の評議員を選出するようになった。

会長:高橋賢一、副会長:半澤道郎、宮田四郎、監事:加藤弘、小野忠 理事長:岡田光夫、専務理事:鷲田和彦

理事: 庄内貞夫、鎌田正人、村上隆保、中曽根宏、瀬川常雄、久保田学昭和56年4月から、北海道体育協会との事務連絡の都合上、北海道立札幌中島体育センター本館事務室内に乗馬連盟の事務机と書庫を置き、事務処理を行うこととなった。

昭和57~58年度にかけて、総務部、審判部、強化部を設けて理事が分掌し、 また、理事会規程、各部規程、国体等参加人馬選考基準、物品貸与規程、事 務処理規程、優秀乗馬指定規程、旅費及び手当支給規程などを改正あるいは 施行した。

この年での日本馬術連盟公認審判員は、国内審判員8名、地方審判員24名 であり、北海道乗馬連盟会員数は540名(学生生徒91名)、所有馬164頭と なっている。

昭和59年度には、第44回はまなす国体馬術競技の強化事業が開始され、北海道乗馬連盟としての体制づくりを行った。

まず、宮田副会長を委員長とする44国体馬術競技強化対策委員会を組織し、「44国体馬術競技強化対策委員会規程」及び「44国体馬術競技強化指定馬選抜養成受託事業実施規定」を制定し、北海道国体局事業の受託体制を整えた。

この事業は、昭和60年度から毎年20頭づつ審査会により競技馬を指定し、道から飼育管理費を交付し強化訓練も行うというもので、国体開催直前まで

続けられた。

北海道乗馬連盟役員は、国体準備に向けて理事を2名増員(会長1、副会長2、理事10、監事2の計15名)したが、高橋賢一氏を会長とする体制は、44国体馬術競技優勝という好結果もあって、平成3年度まで続いた。その間宮田副会長が家庭の事情で退任されて静岡に移られた(現在旭川市に在住)。平成2年度の役員改選でさらに2名増員し(会長1、副会長2、理事13、監事2の計18名)、現在に至っている。

平成4年度を迎えて、高橋賢一会長が高齢等を理由に退任を申し出られ、 慰留につとめたが辞意が堅く、高橋会長からの推薦もあり全会一致で加藤弘 氏が会長に選ばれ、他の役員も改選された。

この間、昭和63年度には北海道乗馬連盟事業の企画・執行体制の強化を図り事業部(後の事業推進委員会)を設置し、それまでの総務部、審判部、強化部はその中に編入し全体的な編成換えを行った。

3 北海道乗馬連盟事業実績

(1) 連盟主催事業

① 講習会事業

初心者を対象とした北海道乗馬講習会は、昭和38年頃から毎年1回道 内各地区で実施してきたが、平成2年度からは毎年2地区づつ北海道初 心者・社会人馬術大会と併催するようにしている。

北海道馬術指導者講習会及び北海道審判講習会は、道内の審判員の研修は勿論だが選手・指導者の研修をも含めて実施してきた。平成元年頃から毎年1回実施していたが、平成4年度からは春・秋と年に2回実施している。

② 強化事業

国体参加人馬の強化訓練、東日本馬術大会・全日本馬術大会への参加 補助を実施している。

昭和58年度から、道内競技会における年間成績をもとに、毎年10頭程度の北海道乗馬連盟優秀乗馬を指定し、飼育奨励金の交付を行い、優秀

乗馬の育成を奨励している。

平成5年度から、北海道乗馬振興基金を設立し、関係各方面から寄付を求め道内大会への飼育奨励金あるいはヤマハホースショーなどへの参加補助として役立てている。

③ 競技会事業

競技会開催会場は、平成元年度までは各地区持ち回りで仮厩舎の設営に苦労しながら、各大学馬術部、岩見沢競馬場、札幌競馬場、北星乗馬クラブなどを使用していた。

平成2年度からは、ノーザンホースパークのご好意により大半の競技会をここで集中的に開催することができるようになり、設備も整っているため大会運営の負担もかなり軽減され、また、白井民平氏のご協力もあり、それまでにない充実した楽しい大会となってきている。

北海道馬術大会兼国民体育大会馬術競技北海道地区予選

昭和29年(1954)に第1回(国体は第9回)大会を開催してから毎年 実施し、その後北海道体育大会の馬術競技を兼ねて開催し、昭和56年に は第28回大会を帯広畜産大学馬場で開催したが、その参加者は94名、参 加馬は71頭あった。昭和42年の第14回大会時は参加馬は25頭であったが、 平成4年度は参加者85名、参加馬67頭であった。

北海道団体馬術選手権大会

昭和31年に第1回大会を開催してから、時代は自馬による大会に変遷し、昭和56年第16回大会を岩見沢競馬場で開催したが、その後間もなく 廃止した。

北海道自馬馬術大会

国体予選への参加が増加し、自馬による競技中心になり、全道的大会を増やす要望が高まり、昭和41年に第1回大会を札幌競馬場で開催し、昭和42年大会では参加者63名、参加馬20頭、昭和56年第16回大会では参加馬64頭、平成5年度第28回大会(浦河乗馬公園)では、参加者143名、参加馬111頭の多きを数えるに至っている。

日本馬術連盟公認北海道地区馬術大会

現在は、日本馬術連盟主催となっているが、昭和51年度には第1回大会を帯広畜産大学馬場で開催し、参加馬54頭、第6回大会は日高ケンタッキーファームで開催し、参加者96名、参加馬67頭、平成5年度第18回大会(ノーザンホースパーク)では、参加者99名、参加馬115頭であった。

参加が特に増加しているのは、浦河64国体終了後の著しい傾向である。 北海道馬場馬術大会

昭和62年度に道内馬術のさらなる発展に期待を込めて、選手権競技として第1回大会を開催したが、大会らしい参加状況となったのは、平成3年度頃からであり、徐々に技術の向上もみられるようになった。この第5回大会から5月開催とし、講習会を併催した。

平成5年度第7回大会では参加者87名、参加馬53頭を数えた。

北海道障害馬術選手権大会

北海道馬場馬術大会と同様の考えで、昭和62年度から開催している。 平成4年度第6回大会では、参加者45名、参加馬53頭で大会の開催主旨 に今一つといったところである。

北海道高校生馬術大会

北海道高校馬術連盟が主管して大会を開催しており、昭和56年度に第 10回大会を開催している。毎年4回、札幌競馬場、日高育成牧場、ノー ザンホースパークなどで開催しており、平成3年度からは国体少年北海 道選手の選考も兼ねるようになった。

北海道初心者馬術大会·北海道社会人馬術大会

昭和38年度に第1回大会を札幌競馬場で開催したのが最初である。この大会は北海道乗馬講習会とあわせ、札幌地区、岩見沢地区、旭川地区、十勝地区、胆振地区、函館地区などと地区ごとに開催している。(現在は年に2地区)

第1回対ニュージランド・ジュニア障害馬術大会

平成5年度から、北海道乗馬連盟主催、日本馬術連盟公認で、隔年に

開催されることになり、今年はノーザンホースパークで開催された。 ノーザンホースカップ大会と併催され盛会であった。

④ はまなす (浦河) 国体強化事業

44国体と称されたこの大会の北海道地区代表人馬の育成強化事業は、 働北海道体育協会と北海道国体局の補助のもとに当連盟が会員及び関係 各方面の協力により、企画実行した。(昭和59年度~昭和64年度=平成 元年度)

昭和59年度当初は、北海道乗馬連盟による乗馬買い上げ(40頭程度) と競技馬育成及び選手養成を、集中的に実施するという考え方もあった が、年度後半に急遽その後実施された指定馬方式が採用され、7月19日 北海道議会会議室において北海道国体準備室に対して申し入れ、承認さ れた。

その結果、側北海道体育協会及び44国体競技力推進本部は選手の強化 育成事業に、北海道国体局は競技施設(用具)整備の一環として競技用 馬の育成強化事業にと、それぞれ分担して実施することとなった。即ち、 当連盟は選手強化費補助は44国体競技力推進本部から、競技馬育成強化 費補助は北海道国体局から受けて事業を推進した。

指定馬事業は、昭和59年度から実施され、毎年20頭の競技馬(障害馬、 馬場馬、総合馬)を当連盟会員所有馬の中から、年2回の指定馬選考審 査会により選考し、飼育管理費を交付し、各種強化事業を行い、国体開 催直前まで実施された。

44国体から、大幅に種目が変更されることになったが、強化事業の実施に支障はなく、予定どおり執行した。

この指定馬事業方式は、理想的に事が進めば誠にすばらしい方法であったが、なかなか理想的には進まず憂慮されたが、いろいろな状況の積み重ねによって国体成績は最高のものとなった。

また、44国体開催による道内における馬術の振興への波及効果は、他の要素と機をを一にして特に胆振、日高方面に著しかった。その後の全道大会への参加人馬数が著しく増加している。(外産馬の増加とジュニ

ア選手、女性選手の活躍が特に)

⑤ その他

このほか、当連盟会員独自の競技会等の開催もあり、その支援も行っている。また、東日本馬術大会、全日本馬術大会、全日本総合馬術大会、 北日本学生馬術大会、全日本学生馬術大会、全国高校馬術大会、オール レディスホースショー、ヤマハホースショー等などの大会にも会員ぞれ ぞれの判断で参加しているが、今後何らかの支援方法を整備していきたい。

(2) 臨時的事業

上記のほか、日本馬術連盟、各種馬術連盟等の依頼を受けて、主管・協力して行う事業も次のとおり行われている。

汎太平洋国際馬術大会北海道旅行

昭和48年度に、全日本ポニークラブ連盟が主催して日本(東京)で開催され、6ヶ国(アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、イギリス、日本)のポニークラブ会員一行が競技会後の行事として北海道旅行に来道したが、その際当連盟で8月21、22日に札幌競馬場から荒井山までの遠乗会、競馬場でのクロスカントリー競技開催、知事招待の知事公館庭園でのレセプション等で歓迎した。

第15回日韓親善馬術大会北海道大会

昭和52年(1977) 7月30日~8月1日、北海道大会の開催要望が韓国側からありそれを受けて、東京大会後(馬事公苑)のこの日程で進められた。

7月30日、札幌市長と北海道乗馬連盟会長招待歓迎レセプション(全日空ホテル)、7月31日、一般及び学生対抗戦(北海道大学馬場)、競技終了後札幌ビール園で懇親昼食会を開催した。

8月1日は、牧場見学会を行った。(浦河家畜市場、日西牧場、西山牧場)

日本馬術連盟主催、北海道体育協会・北海道乗馬連盟主管で開催した。 第15回全国高等学校馬術競技大会

全日本高等学校馬術連盟、北海道体育協会、北海道乗馬連盟共催、江別

市後援で、昭和56年(1981) 8月7~9日の3日間にわたって酪農学園大学馬場で開催された。

最終日には、礼宮文仁親王殿下の台臨を仰ぎ、47校延べ 276名の出場と 盛会であった。

北海道農業祭総合畜産共進会協力

昭和49年(1974)9月1日、北海道畜産会からの要請で、札幌月寒北海 道産業共進会場における開催中の農業祭において馬のアトラクションを実 施、馬事公苑の山谷吉輝氏のポニー演技と札幌競馬場の協力によりカド リール(6騎)を供覧した。

第6回日韓高等学校馬術大会

昭和62年9月13日、北星乗馬クラブ馬場において、全日本高等学校馬術連盟主催、北海道高等学校馬術連盟主管、日本馬術連盟・北海道乗馬連盟・北海道・札幌市後援で開催された。

9月11日来道、9月12日芸術の森及び定山渓熊牧場観光、歓迎パーティー、9月13日には競技会(韓国チーム、日本チーム、北海道チーム、札幌チーム)を開催し、9月14日は、道庁赤レンガ、大倉山シャンツェ、支笏湖、インディアン水車を観光した。

第27回東日本馬術大会

平成3年(1991) 9月20~22日、ノーザンホースパークにおいて、北海道乗馬連盟の主管で北海道で初めて東日本馬術大会が開催された。12都道県、149頭参加。

これを契機に、ノーザンホースパークでは仮厩舎を建設し、他の施設も 含めその後の全道大会を始めとする各種大会に貢献している。

ヤマハ・ノーザン・ホースショー

平成4年度から、ノーザンホースパークで開催されるようになっており、 北海道乗馬連盟もその開催に協力している。

平成5年度は、北海道からの参加を奨励するため、参加補助を交付している。(北海道乗馬振興基金)

'92 | B Gホースショー・ジャパン

平成4年(1992)9月5、6日の2日間にわたって、日本社会人団体馬術連盟主催、VISA特別協賛、日本航空協力、日本馬術連盟・北海道乗馬連盟・日本中央競馬会・地方競馬全国協会・北海道・苫小牧市・北海道新聞社・苫小牧民報社・日刊スポーツ新聞北海道本社・NHK札幌支局・ノーザンホースパーク後援により、5ヶ国(香港、韓国、ニュージーランド、オーストラリア、日本)の参加のもとに、ノーザンホースパークで開催され、北海道乗馬連盟も大会運営に協力した。

第12回日韓高等学校馬術競技大会

平成5年(1993)10月3日、全日本高等学校馬術連盟主催、北海道高等学校馬術連盟主管、日本馬術連盟・北海道乗馬連盟・駐札幌大韓民国総領事館・北海道・北海道教育委員会・苫小牧市・ノーザンホースパーク後援により、全韓国チーム・全日本チーム・全北海道チーム・ノーザンホースパークチームの参加のもとに、ノーザンホースパークにおいて競技会が開催された。

10月2日にウェルカムパーティー、10月3日にフェアウェルパーティーをノーザンホースパークで開催し、10月4日に観光を行った。



年号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
明治5年(1872)	札幌神社祭礼競馬(開拓使勧業課主催)		
明治40年(1907)	北海道乗馬会として札幌競馬を実施後に北海		
頃	道競馬会となり、現在の札幌競馬場に移り		
	札幌競馬倶楽部となった。		· .
大正10年(1921)		国際馬術連盟創立(日本も創始8ヶ国の1つ)	
大正14年(1925)	北海道大学乗馬会(昭和5年創立の北海道大		
	ゲニュニュージャングルード		•
昭和2年(1928)	第1回北海道乗馬大会開催(旭川)		
昭和7年(1932)	,		北海道体育大会(雌雄体
			育協会の前身)創立
昭和8年(1933)	第7師団乗馬大会	第7回神宮体育大会	日本国際連盟脱退
昭和12年(1937)	北海道騎乗大会(旭川;旧北海道乗馬大会)		
	軍旗祭25馬術大会	• • •	٠.
	札幌競馬場倶楽部は日本中央競馬会に統合		
昭和14年(1939)	北海道騎乗大会(旭川)		
昭和15年(1940)	第7回札幌乗馬大会(札幌)	馬事公苑開場	第12回オリンピック
			(東京)中止
昭和16年(1941)	東北乗馬大会	·	
昭和17年(1942)	带広髙等獣医学校騎道班(帯広畜産大学馬術		
	部の前身)創立		
昭和18年(1943)	競馬開催中止、北海道騎乗大会中止(旭川)		
昭和19年(1944)			オリンピック中止、プ ロ野球中止
昭和21年(1945)		社団法人全国馬術連盟創立(日本馬術連盟 の前身)	
		第1回国民体育大会馬術競技開催(京都)	

.

昭和22年(1947)	第2回国民体育大会馬術競技(石川県)一般	馬術競技審判規定制定	
1 (2011)	及び学生対抗リレー競技北海道・東北チー	Maria	
	ム優勝		,
٠	一	·	
昭和23年(1948)	1 (10 (10 (10 (10 (10 (10 (10 (10 (10 (1	社団法人日本馬術連盟と改称(竹田恒徳氏	北海道教育委員会発足
昭和234-(1940)	·	社団伝入日本局例建盟と以称(竹田恒徳氏 会長)	北冊坦教育安貝宏先足
		財団法人日本体育協会に加盟	
		財団法人日本国際馬術協会創立、中央馬事	
		会解散	
		日本馬術連盟公認審査員規程及びアマチュア規	
		程制定実施	·
		第1回全日本馬術大会(京都長岡競馬場)	
昭和24年(1949)		日本馬術連盟乗馬家登録規程制定実施	北海道体育会改め北海
		第2回全日本馬術大会(京都)	道体育協会
昭和25年(1950)	朝鮮戦争勃発	第3回全日本馬術大会(東京乗馬俱楽部)	
昭和26年(1951)	社団法人札幌乗馬俱楽部(札幌愛馬会を母体	日本馬術連盟の国際馬術連盟復帰	
	としている)創立、当時女性だけの会銀鞍	学生馬術王座決定戦(東京)	
	クラブも活躍	第4回全日本馬術大会(横浜)	
昭和27年(1952)		財団法人日本国際馬術協会解散	
昭和28年(1953)	北海道乗馬連盟創立(役員は札幌乗馬俱楽部	東日本馬術大会(岩手県水沢市)	
	役員が兼任)		
	北海道体育協会加盟		
	第9回国民体育大会馬術競技リハーサル大会		
	開催(札幌)	•	
!	第9回国民体育大会馬術競技北海道参加のた		
	め乗馬23頭購入、調教・指導のため日本馬		
	術連盟から元橋忠作氏、荒川米吉氏		
	FIGALIER STOTIERS FOR SIGNIFICATION		
			•

August Faller of President

	T		
年 号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
昭和29年(1954)	第9回国民体育大会馬術競技開催(札幌)	日本中央競馬会から日本馬術連盟に対し最	
	第1回北海道馬術競技大会開催(国体予選:	初の助成金交付	
	札幌)	日本中央競馬会法施行	
	北海道乗馬連盟設立総会:役員、連盟規約決	·	
	定。会長に菊池吉次郎氏、常務理事に庄内		
	貞夫、武田啓介、原島つる子、遠山範重、		
	松本久喜の各氏が就任。		
	北海道乗馬連盟事務局を中央競馬会札幌競馬		
	場事務所内に設置し、山下輝幸氏と姉崎保		
	氏が事務担当者となった。		
昭和30年(1955)		第1回学生馬術講習会開催(馬事公苑)	
昭和31年(1956)	第1回北海道団体馬術選手権大会開催		
昭和32年(1957)	第1回東北・北海道馬術大会北海道予選(札		
	幌)		
昭和33年(1958)	第1回招待全日本女子学生馬術選手権大会		
	(札幌)		
·	北海道学生馬術選手権大会(帯広)		
	第13回国民体育大会馬術競技(富山県) 4 位		
	一般自馬総合馬術競技優勝(千葉幹夫:北楡)		, i
昭和34年(1959)	北海道学生馬術選手権大会開催(札幌)	日本馬術連盟総合馬術講習会(奥州種畜牧	
	東北・北海道馬術大会開催(札幌)	· 场)	
	北海道団体選手権大会(帯広)、第1回札幌	·	•
	市民体育大会		
	第6回北海道馬術大会開催(札幌)	•	
	第14回国民体育大会馬術競技(東京都)2位		
	一般自馬六段飛越競技優勝(森本悌次:北		
	嶺)		
	<u> </u>		

昭和35年(1960)		į	
	幌)	('	
	東北・北海道学生馬術選手権大会開催(札幌)	·	·
	酪農学園大学馬術部創立		
	第15回国民体育大会馬術競技(熊本) 4 位	.	
	一般自馬中障害飛越競技優勝(大場善明:		
	北嶺)		
	第13回全日本馬術大会(岡山)		
	中障害飛越競技 A 優勝(山本南海男:碧雲)		
	第10回全日本学生賞典障害飛越競技会(馬事		
	公苑)		
	団体優勝 帯広畜産大学馬術部		
	(全日本学生王座決定戦)		
昭和36年(1961)	第16回国民体育大会馬術競技(秋田県)優勝		
	高校生自馬馬場馬術競技優勝(小佐部宣直		
	: 洋孝)		
	一般自馬六段飛越競技優勝(塚本進:碧雲)		
	第14回全日本馬術大会(福島)		•
	六段飛越競技優勝(秋山克彦:東霧)		
·	第11回全日本学生賞典障害飛越競技会(馬事		
	公苑)		
	団体優勝 帯広畜産大学馬術部		
	(全日本学生王座決定戦)		
		. છ	
	·		

•

-

年 号	北海道乗馬連盟等	日 本 馬 術 連 盟 等	北海道体育協会等
昭和37年(1962)	第17回国民体育大会馬術競技(岡山県) 3 位	第1回日韓親善馬術大会(馬事公苑)	
	高校生自馬馬場馬術競技優勝(山崎毅紀:		
i	洋孝)		
	一般貸与馬中障害飛越トーナメント優勝		
	(八木正巳、小出英夫、田中昭志)		
	第12回全日本学生賞典障害飛越競技会(馬事		
	公苑)		
;	団体優勝・北海道大学馬術部		
	(全日本学生王座決定戦)		
	個人優勝 恩田正臣		
	日本馬術連盟公認審査員認定(山本智)		
]	北海道乗馬連盟会長に髙橋賢一氏、副会長に		
	武田忠幸、松本久喜、阿部康毅、理事長に		
	上内貞夫の各氏が就任 東教民は本藤弟 氏 (北海洋七学典学知本)		
	事務局は斎藤善一氏(北海道大学農学部畜 産学科内)が担当(18団体)		
昭和38年(1963)	第18回国民体育大会馬術競技(山口県) 6 位		
HE4H00++(1900)	第1回出海道初心者・社会人馬術大会(札幌)	·	,
	開催開始		·
	第16回全日本馬術大会(山口)		
	中障害飛越競技甲 優勝 (鎌田正人:セン		
	トベル)	•	
			·
	1		

昭和39年(1964)	第19回国民体育大会馬術競技(新潟県) 3 位	第18回オリンピック開催(東京)	
	高校生自馬馬場馬術競技優勝(内山六郎:		
	洋孝)		
	一般貸与馬障害飛越トーナメント優勝(田		
	中、加藤、山村)		
	日本馬術連盟公認審査員認定(庄内貞夫)		
	北海道乗馬連盟副会長に半澤道郎氏就任(松		
	本、阿部副会長は退任)		
	北海道乗馬連盟事務局を山本智氏(札幌鉄道		
	公安室)担当	u.	
昭和40年(1965)	北海道スポーツ少年団本部編成	第1回東日本馬術大会開催(馬事公苑)	
	日本馬術連盟公認審査員認定(井上忠吉)	日本乗馬少年団連盟創立	
	第17回全日本馬術大会(東京)	全日本高等学校馬術連盟創立	
	中障害飛越競技パルクール・ト・シャス 優勝(久保	第1回北日本馬術大会(福島競馬場)	
	田学:春洋)		
昭和41年(1966)	第1回北海道自馬馬術大会(札幌競馬場)始	遊佐幸平氏逝去	
	まる	日本馬術連盟総合馬術競技会(山梨県清里)	
	日本馬術連盟第2種公認審判員となる(7名		
بر	: 山崎善輝、八木正巳、魁生晴夫、氏間慎		•
	夫)		•
	第12回全日本学生賞典障害飛越競技会(杉谷	,	
	馬事公苑)		
	個人優勝 中島文夫		
		·	
·			
			·
L	<u> </u>		

	İ	
Ç	7	1
c		3
		٠

		The state of the s	
年 号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
昭和42年(1967)	北海道乗馬連盟理事を加盟各団体から1~2 名とし、事務局は半澤副会長と山本理事長 が担当した(北海道大学農学部)、副会長 に庄内貞夫、石井幸次郎各氏が加わり4 名、理事長に山本智氏が就任 第22回国民体育大会馬術競技(埼玉県)8位 高校生貸与馬障害飛越トーナメント優勝 (馬場英司、布施佐知子、福田博明)	第1回全日本高等学校馬術競技大会(馬事公苑)	財団法人北海道体育協 会となる
昭和43年(1968)	第3回北海道自馬馬術大会兼国体高校地区予選(札幌) 開道 100年札幌市創建 100年記念馬術大会 (札幌)	日本社会人団体馬術連盟創立、第1回社会 人馬術大会(東京) 第20回全日本馬術大会(馬事公苑) 複合馬術競技(千葉幹夫:ジョセフィン)	·
昭和44年(1969)	北海道乗馬連盟事務局を学内紛争のため山本 智宅に置く	全国都道府県馬術連盟会長、理事長協議会 開催(湯島会館)	
昭和45年(1970)	第25回国民体育大会馬術競技(岩手県) 高校生貸与馬障害飛越トーナメント優勝 (星野良三、古賀幹朗、田中俊輔) 第13回全日本学生 3 - DAY BVENT (総合馬術 :大井) 個人優勝 山口公章(帯広畜産大学馬術部)	第22回全日本馬術大会(馬事公苑) 複合馬術競技(千葉幹夫:ジョセフィン) ・	
			•

ſ.

			<u> </u>
昭和46年(1971)	第26回国民体育大会馬術競技(和歌山県) 高校生貸与馬障害飛越トーナメント優勝 (田中俊輔、中村隆志、前裕二) 第14回全日本学生3-DAY EVENT (総合馬術:阪神) 個人優勝 三木田照明(帯広畜産大学馬術部)		
昭和47年(1972)	第24回全日本馬術大会(馬事公苑) パルケール・ド・シャス 優勝(恩田求:柏勝)	日本馬術連盟第1回総合馬術選手権大会 (馬事公苑)	
	The second secon	全国乗馬俱楽部連合会発足	
昭和48年(1973)	第28回国民体育大会馬術競技(千葉県) 2位 一般複合馬術競技優勝(山田源一郎:柏勝) 高校生貸与馬障害飛越トーナメント優勝 (油谷光治、大阪進、渥美誠) 北海道乗馬連盟事務局を札幌競馬場に移転、 総務部及び競技部設置、西村札幌競馬場場 長が副会長・理事長を兼任 この年まで日本馬術連盟北海道理事に山本 智氏が就任 汎太平洋国際馬術大会北海道見学旅行(全日 本ポニークラブ連盟主催) 今はない井上乗馬倶楽部、北海道工業大学馬 術部、函館乗馬クラブが会員であった。 第25回全日本馬術大会(馬事公苑) パパケール・ド・シャスB (柏村文郎:柏鷹)		

ı	
52	
1	

	11 14 114 114 mm mm 114 mm 114	the bar and the	1 11 15 15 15 15 15 A A
年号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
昭和49年(1974)	北海道乗馬連盟事務局を小野、片寄理事が担	東京国際馬術大会 (C.H.I.; 馬事公苑)	,
	当、パート事務員採用、理事長に半澤道郎氏就任		
	日本馬術連盟北海道理事に佐藤俊彦氏就任		
	北海道農業祭総合畜産共進会協力(札幌月寒)		
	第29回国民体育大会馬術競技(茨城県) 4 位		
	一般総合馬術競技優勝(布浦敏一:ハッヒー)		
	第24回全日本学生賞典障害飛越競技会(馬事	·	
	公苑)	•	
1	団体優勝 帯広畜産大学馬術部		
	個人優勝 添田昌一(スターライト)		
	第17回全日本学生3-DAY BVENT (総合馬術		
	: 馬事公苑)		
	団体優勝 帯広畜産大学馬術部		
	個人優勝 山田源一郎(柏勝)		
	第17回全日本学生馬術大会3種目総合成績		
	(馬事公苑)		
	団体優勝 帯広畜産大学馬術部		•
昭和50年(1975)	日本馬術連盟北海道理事に半澤道郎氏就任	be _c	
昭和51年(1976)	第1回北海道地区馬術大会開催(帯広)		
	北海道乗馬連盟規約改正、事務局担当鷲田和		·
	彦常務理事		
	第31回国民体育大会馬術競技(佐賀県)		
	成年総合馬術競技優勝(斎藤保則:柏栄)		
	第28回全日本馬術大会(馬事公苑)		
	中障害飛越競技(長屋滑隆:スターライト)	·	
	第26回全日本学生賞典障害飛越競技会(馬事		
	公苑) 個人優勝 斉藤保則(柏栄)		
		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	

	I
c	,
Č	٨
	ı

	T		
昭和52年(1977)	北海道スポーツ少年団本部改め北海道スポー	第1回ジュニア障害飛越競技選手権大会	
	ツ少年団	(馬事公苑)	
	第15回日韓親善馬術大会北海道大会開催(札		
	幌)		
	北海道乗馬連盟監事に加藤弘現会長就任		
	第27回全日本学生賞典障害飛越競技会(馬事		
	公苑)個人優勝 長屋清隆(スターライト)		
昭和53年(1978)	第33回国民体育大会馬術競技(長野県)	日馬連全国県馬連事務担当者連絡会議(馬	
	少年貸与馬障害飛越団体トーナメント優勝	事畜産会館)	
	(宇野昭浩、中島雅春)		
昭和54年(1979)	第31回全日本馬術大会(東京)	日本馬術連盟審判員規程改正	
	選抜中障害飛越競技優勝(髙橋均:ドン・	第22回全日本学生馬場馬術競技会(馬事公	
	ホッパー)	苑)	
	第34回国民体育大会馬術競技(宮崎県)8位	第22回全日本学生 3 - DAY EVENT (総合馬	
·		術:馬事公苑)	
		個人優勝 飯島雅明(専修大学馬術部)	
昭和55年(1980)	第44回国民体育大会昭和64年北海道完全開催	日本馬術連盟審判員プレザーコート制定	
	内定		
	第35回国民体育大会馬術競技(栃木県)2位		
	少年障害飛越競技団体優勝(吉沢克己、伊	·	
·	藤圭三)		
	北海道乗馬連盟理事長に岡田光夫氏就任	4 ·	
昭和56年(1981)	第15回全国高等学校馬術競技大会(江別·酪	日本社会人団体馬術連盟創立	
	農学園大学)	日本馬術連盟馬術資格(騎乗者資格:D級	
	北海道乗馬連盟役員組織改編のため暫定的に	• C級指導者資格) 認定開始	,
	仮称拡大役員会を設置した (12名)		
	北海道乗馬連盟事務局を4月に北海道立札幌		
	中島体育センター内に実質的に移転		

.

<i>F</i> 🖂	11. 光 米 岩 田 油 畑 州	口士匠作油用处	北海岸大东村人类
年 号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
昭和57年(1982)	第37回国民体育大会馬術競技(島根県) 3 位		
	北海道乗馬連盟新会則制定、役員を13名とし	ド・ニューデリー)	
		·	
	議員を選出、審判部、総務部、強化部を設		
}	置し関連規程の整備を始めた。	·	
	北海道乗馬連盟会長に髙橋賢一、副会長に	•	•
	半澤道郎、宮田四郎、監事に加藤弘、小野	·	
	忠、理事長に岡田光夫、専務理事に鷲田和		•
	彦の各氏が就任		
	第34回全日本馬術大会(東京)		
	中障害飛越選手権競技2走行優勝(坂東義		•
	和:柏星)		
昭和58年(1983)		第1回社会人団体馬術連盟個人選手権大会	
		(馬事公苑)	
	·	第1回アジア国際障害馬術大会(馬事公苑)	
昭和59年(1984)	44国体馬術競技強化事業始まる。昭和60年度	全日本馬場馬術大会独立(馬事公苑)	
	から指定馬事業を北海道国体局の補助によ	第1回C.S.I.TOKYO(馬事公苑)	
j	る計画を策定		
	第39回国民体育大会馬術競技(奈良県)2位		
	第18回全日本高等学校馬術大会優勝(浦河高		
	等学校)	> .	
	第37回全日本馬術大会(東京)		
	内国産馬スヒート・アント・ハンティネス 優勝(土井仁:		
	ザ・チャーリー)		
·			

	l
ç	,
	ı

昭和60年(1985)	北海道乗馬連盟専務理事に八木正巳氏就任 44国体馬術競技強化指定馬育成事業開始(昭	日本馬術連盟定款制定、第1回日本馬術連 盟評議員会開催	
	和64年度まで)		
•	第1回指定馬選考審査会開催(10月:モモ		
	セライディングファーム)	·	:
	第30回北海道団体馬術選手権大会開催(北星		
•	乗馬クラブ)		
昭和61年(1986)	北海道乗馬連盟役員改選、全員留任、理事2	日本馬術連盟B級・A級騎乗者資格、イン	
. 1	名增員	ストラクター及びアシスタント・インス	
·	第16回全日本総合馬術大会(東京)	トラクター認定暫定措置	
	一般競技優勝(布施佐知子:チアガール)		•
昭和62年(1987)	第17回全日本総合馬術大会(山梨県)	国民体育大会開催は沖縄を持って日本列島	
`	ジュニア選手権競技優勝(布施勝:サミッ	一巡を終える。	
	h)	第30回全日本学生3-DAY EVENT (総合馬	
	第6回日韓髙等学校馬術大会開催(9月:北	術:馬事公苑)	
	星乗馬クラブ)	第30回全日本学生馬場馬術競技会(馬事公	
	第42回沖縄国体馬術競技において東北以北の	苑)	
	参加乗馬を関係道都県馬術連盟で資金協力	個人優勝 村上恵祐(明治大学馬術部)	
	し、航空機(往復)で輸送した。成績は総	•	
	合で9位でしたが、乗馬の保護のためには		
,	最高でした。		
		•	

1
56
1

		·	
年 号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
昭和63年(1988)	第44回国民体育大会リハーサル大会開催	日本馬術連盟騎乗者・指導者資格認定試験	
	北海道乗馬連盟役員改選、全員留任	制度実施	
	第24回東日本馬術大会(山梨)	日本馬術連盟競技者規程制定	
	内国産馬障害飛越選手権競技優勝(長屋清	第40回全日本障害飛越馬術大会(群馬)	
ł	隆:カリスタヒーロー)	内国産馬標準障害飛越予選競技優勝	
		(大谷直生:リューク)	
平成元年(1989)	第44回はまなす国民体育大会(浦河)馬術競	第41回全日本障害飛越馬術大会(馬事公苑)	
	技優勝	内国産馬標準障害飛越予選競技優勝	
	成年2部馬場馬術競技優勝(丹治輝明:二	(大谷直生:リューク)	
	ットクジャンボ)		·
	成年2部スヒードアンドハンティネス競技優勝(大町		
	哲也:柏星)		
	成年一部総合馬術競技優勝(宮竹智明:チ		
	ップマンク)		
	少年標準障害飛越競技優勝(佐伯光夫:カ		·
	リスタヒーロー)	·	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
	成年一部クロスカントリー競技優勝(賀山髙:コジ		
	ロウ)	•	
	第41回全日本障害飛越馬術大会(馬事公苑)		
	内国産馬障害飛越選手権競技優勝(武笠昭		
	男:フェニックス)		
	••		
		• .	

	11 14 14 14 m² m² 14 m² m² 14 m²		
平成2年(1990)		第42回全日本障害飛越馬術大会(大坂・杉	北海道体育協会国体推
	北海道乗馬連盟半澤副会長東京出張時に発病	谷)	進室を競技力向上対
	北海道乗馬連盟コーステサイン講習会開催(11月:	標準大障害飛越予選競技優勝(大谷直生	策室室を競技力向上
	ソーザンホースパーク)	:リューク)	対策室(競技力向上
		内国産馬スヒードアンドハンティネス 予選競技	課)に改組
		(布施勝:明姫)	
平成3年(1991)	第46回国民体育大会馬術競技(石川県) 4 位	日本馬術連盟制定の馬場馬術競技課目及び	(
	少年団体障害飛越競技優勝(佐伯光夫、緒	総合馬場馬術競技課目の変更、ならびに、	
	方美絵、千島俊司:ヒロパピー)	FEI制定の総合馬場馬術競技課目の変	
	少年リレー競技優勝(佐伯光夫:カリスタ	更	
	ヒーロー、畠山慶和:レイノルビオ)	×	
	日本馬術連盟北海道理事に岡田光夫氏、評議	v.	·
	員に八木正巳氏就任(この年まで岡田光夫)		
	氏が評議員)		
	第27回東日本馬術大会開催(ノーサンホースハーク)		
	第15回全日本障害飛越選手権大会(大坂、杉	•	
	(一谷)		
	- 標準障害飛越競技ポニーライダー優勝		
	(白井岳:メイシャ)		
·	シュニアライター優勝(畠山慶和:レイノルビオ)		
	スピード アンド ハンディネス 競技ポニーライダー優勝	•	
	(白井岳:メイシャ)		
	ジュニアライダー優勝(畠山慶和:ジェロニモ)		
	ポーライダー選手権競技優勝(白井岳:メイシャ)		
	^/11 医寸惟别汉俊册(口升缶:/1/¶/ 		
	-		
L	l,	 	<u></u>

	ı	
۶	Ž	ו
•	ì	

年 号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
平成 4 年(1992)	北海道乗馬連盟役員改選、会長に加藤弘、副	第47回国民体育大会馬術競技(山形県)	
	会長に岡田光夫、吉田勝巳、監事に高橋了	インストラクター更新講習会開催(ノーサンホー	
	平、高田左内、理事長に八木正巳、専務理	スパーク)	
	事に竹之内博康、技術担当理事に白井民平、	FEI馬場馬術競技運動改正課目の実施	
	理事に小野忠、三浦勲、橋本民雄、鎌田正		
	人、村上隆保、中曽根宏、山崎善輝、小川		
	石美、菊池孝、久保田学の各氏が就任(18		
	名)		
	北海道乗馬連盟髙橋了平監事障害飛越競技走		
	行中落馬事故で負傷(年末に逝去)		
	'92 ヤマハ・ノーザン・ホースショー(ノーザンホースパーク)		
	'92 IBG ホースショー・ジャパン(ノーザンホースパーク)		
	第26回全日本髙等学校馬術競技会優勝(札幌		
	光星髙校)		
	第16回全日本ジュニア障害飛越選手権大会		
	(大坂:杉谷)		
	ポニーライダー選手権競技優勝		•
	(吉田俊介:スーパージャック)		
	ジュニアライダー競技スヒード・アンド・ハンティネス 競		
:	技優勝 (白井岳:ラレイ)		,
	ジュニアライダー選手権競技優勝		
	(畠山慶和:レイノルビオ)	•	
	·		
			•
	,		
L			

ı	
Ç	1
Œ	2
-1	

平成 5 年(1993)	北海道乗馬連盟監事に河田啓一郎氏就任、小		
	川石美理事転勤で佐藤治男氏理事に		
	日本馬術連盟国体委員に白井民平氏就任		,
	′93 ヤマハ・ノーザン・ホースショー(ノーザンホースパーク)		
	第1回対ニュージーランド・ジュニア障害馬	•	
	術大会(ノーサンホースハーク)		
	第17回全日本ジュニア障害飛越競技選手権大		
	会(大坂:杉谷)		,
	ジュニアライダー標準障害飛越競技優勝	·	
	(白井岳:クロワドヴィコンテ)		
	ポニーライダー スヒード・アンド・ハンティネス 優勝		
	(天羽真崇:メイシャ)		
	ポニーライダー総合成績優勝		
	(天羽真崇:メイシャ)	·	
	ポニー選手権競技優勝		
	(天羽真崇:メイシャ)		
	第12回日韓髙等学校馬術競技大会開催		
	(ノーザンホースパーク)		
	第29回東日本馬術大会(山梨県)		
	内国産馬障害飛越選手権競技優勝		
	(吉田俊介:ダイナアトランダム)		
	標準大障害飛越競技優勝(白井岳:シドラ)		
	中障害スピード&ハンディネス競技優勝		
	(白井岳:キングストンボーイ)		
	大障害飛越選手権競技優勝		
	(白井岳:シドラ)	·	
	·		
		·	

.

年 号	北海道乗馬連盟等	日本馬術連盟等	北海道体育協会等
	第48回国民体育大会馬術競技(徳島県) 4位 成年2部標準障害飛越競技優勝 (吉田俊介:ダイナアトランダム) 北海道乗馬連盟創立40周年記念式典・祝賀会 開催(札幌グランドホテル) 北海道乗馬連盟40年史発行		
		1	

功労者及び功労馬受賞一覧

(1) 社団法人日本馬術連盟功労者表彰

昭和43年度:高橋 賢一、武田 忠幸

昭和45年度:太秦 康光、井上 忠吉

昭和48年度:原島つる子

昭和59年度:鷲田 和彦

平成3年度:半澤 道郎

(2) 社団法人日本馬術連盟功労馬表彰

昭和40年度:洋孝号

昭和45年度:碧雲号、雲霧号、広風号

昭和48年度: 勇勝号、北櫻号、キングフレーム号

昭和50年度:柏鷹号

昭和51年度: 舟政号

昭和54年度:柏勝号

昭和55年度:スターライト号

昭和59年度:ドンホッパー号

昭和61年度:テレサ号

昭和62年度:隆孝号

昭和63年度:柏栄号

平成元年度:ゼファー号

平成5年度:トカチムサシ号

(3) 財団法人北海道体育協会表彰

創立50周年記念・昭和57年度: 庄内 貞夫

第1回・昭和58年度:北海道乗馬連盟

第2回·昭和59年度:半澤 道郎

第7回•平成2年度:大町 哲也、賀山 高、佐伯 光夫、武笠 昭男、

丹治 輝明、宮竹 智明

(4) 財団法人北海道体育協会スポーツの優秀な成績を収めた者表彰

昭和37年度:山崎 毅紀、滝沢 迪子

全北海道チーム、北海道大学馬術部

昭和38年度:鎌田 正人

昭和39年度:内山 六郎

昭和40年度:久保田 学

昭和50年度:布浦 敏一

(5) 南部忠平奨励賞

第8回(昭和55年度): 第35回国民体育大会馬術競技少年の部チーム

(札幌光星高等学校)

第12回(昭和59年度):浦河高等学校馬術チーム



編 集 後 記

平成4年秋、加藤会長から、ぜひ、北海道乗馬連盟40年史を編纂して欲しい という依頼があり、役員会及び理事会においても積極的に賛同が得られ、我々 編集委員が未熟ながらその任に当たることとなった。

40周年となる日は、平成5年10月で、当初は一応の目途は立てたがどの辺から手を付ければよいのか、具体的に形が見え始めたのは平成5年7月頃であった。ともかく、寄稿文及び写真・資料などの協力依頼を3月に出すことから開始した。予定の立てようがなかったが、結果的に予定のページ数を満たす程度という意味では予想どおりの集まり具合と言えた。しかし、まだまだ十分とは言えませんというのが実感です。今後も資料は整備していきたいと考えます。40年史発刊後も、何か情報がありましたら、どしどしお寄せください。

ともあれ、冷や汗ものの40年史発刊ですが、このような時期にこのような仕事をすることができたことは、大変幸せなことであり、また、大きな思い出となるでしょう。

ここに、ご協力を頂きました編集委員の方々、寄稿或いは資料を提供してくださった方々には特にお礼を申し上げるとともに、40年史発行及び40周年記念行事にわたってご協力ご支援をいただいた方々にも深く感謝を申し上げます。

さらに、この40年史発刊を契機に、北海道乗馬連盟がますます発展すること を祈念して編集にあたっての結びといたします。

(編集委員 八木 正巳 記)

 編集委員
 竹之内
 博康

 山崎善輝
 松下 敏昭

 山田
 亨

北海道乗馬連盟40年史

平成5年11月23日発行

編 著 北海道乗馬連盟 4 0 年史編集委員会

発行者 加 藤 弘

発行所 北海道乗馬連盟

札幌市中央区中島公園1番5号

北海道立札幌中島体育センター内

TEL. 0 1 1 - 5 1 1 - 5 7 3 1

印刷所 福島プリント株式会社

札幌市中央区南9条西16丁目1番地23号

TEL. $0\ 1\ 1-5\ 6\ 1-3\ 7\ 3\ 7$